

京漆器老舗

「美濃屋」保存資料

(本館蔵)

目次

- 一、京漆器老舗 美濃屋
- 一、美濃屋歴代当主
- 一、美濃屋家系図
- 一、美濃屋保存京漆器寄贈目録
- 一、美濃屋出入の工人達
- 一、美濃屋文書・文献資料

京漆器老舗 美濃屋

美濃屋は安永元年(一七七二)、越前国出身の稲垣孫兵衛が創業した塗物道具商であった。代々美濃屋孫兵衛と称し、京三条寺町(はじめは寺町錦小路)に店舗を構えた京漆器の老舗である。昭和二十年九月稲垣孫一郎氏が、時代の状況からその製品の品格を保てないという判断を以て、家業を閉ざすまで、近代の京漆器の優品を製作し続けてきた。

その商法は現在の店舗売とは異なり、顧客の求めに応じ、あるいは顧客の要求を察して、道具を製作するというもので、主人はそれらの器形・意匠を考案し、またその家の格式にあわせて造ったものである。一年先、三年先という製作の仕方である。その為、店にはさまざまなお抱え職人が出入し、主人の指示により道具を製作して

いった。京漆器の老舗を保つ為には当時名工といわれた、塗師・蒔絵師・ろくろ師・指物師を抱える必要があったし、主人はこれら工人を総合的に手足の如く動かすだけの力量がなければ店の風格は保てなかったのである。

美濃屋は宮内省御用達であった。また顧客は関西はもとより、関東にもおよび、岩崎家・住友家・大原家をはじめ、諸名家の愛顧をうけた。このことから、その京漆器老舗の名のりも知られよう。

今回、本館に寄贈を受けた品々は、美濃屋製品の試作品、あるいは商品見本である。そのため道具として数が揃わないものもあるが、その巾広い製作品と、その技術の妙・意匠の粋などは十分に理解され得るものである。良き時代の本格的京漆器、それが老舗美濃屋の製品である。これらは平成二年十月十一日、稲垣孫一郎氏により一括京都国立博物館に寄贈された。

美濃屋歴代当主

初代 塗物道具商

美濃屋孫兵衛

安永元年正月創業

二代孫兵衛

安永九年八月相続

三代孫兵衛

文化九年正月相続

四代孫兵衛

美濃屋家系

朝倉氏家臣
宇野重郎左衛門尉
万治三年七月没

靱垣孫太夫
明和八年五月没

宇野三郎太夫女
天明八年十一月没

靱垣孫太夫
寛政元年五月没

宇野三郎太夫女
寛政十二年三月没

初代 美濃屋宗助より別家 寺町錦小路に
安永元年正月 塗物道具商創業

美濃屋孫兵衛

稲垣の姓を名のる

安永九年八月没

中野伊左門女

父伊左門は堅田村

船大工頭領

天明七年五月没

万屋孫八
文化七年八月没

六代 慶応三年十月相続
孫兵衛
明治初年改築
老舗に相應の趣きあり
明治二十一年十二月没

宇野三郎太夫四男
幼少にて上京 幼名与四郎
上京後亀次郎と改む

二代 安永九年八月相続
孫兵衛

文化十四年六月没

女 天保十二年五月没

天明八年大火類焼
即再建 家業隆盛に向う
堅田中野家よりの援助による

三代 文化九年正月相続
幼名清吉
孫兵衛

文政十二年初代五十回忌を手厚く営む
嘉永六年三月没

七代 明治二十一年十二月相続
孫兵衛(其外)
商家には格外、台湾に渡り
文筆家として名声を得る
同地に没す
功績顕彰の碑あり
昭和十二年三月没

八代 杉田市太郎三男 明治五年生
年少より稲垣家に奉公
明治二十九年末相続

和三郎
大正九年二月没(四十九歳)

寺町三条に移る
家業昂揚する
宮内省御用達

あさ

四代 天保十一年十一月相続
幼名秀次郎 後 又兵衛

孫兵衛
天保十五年三月没

五代 嘉永二年四月相続
幼名与三郎 後 十藏 別宅して十兵衛

孫兵衛
元治元年「鉄砲焼」と称した
大火にて類焼家財焼亡
家屋新築
神戸・長崎に進出
慶応三年十月没

倭三郎
大正九年結婚入家
九代孫一郎を後見
以後経営を終生協力す
昭和四十三年正月没

たみ
明治三十八年十一月二十日生
大正九年二月相続
政府認定技術保存有資格

九代
照宮内親王婚儀調度謹納
昭和二十年家業を閉す

孫一郎

天保十一年十一月相続

五代孫兵衛

嘉永二年四月相続

六代孫兵衛

慶応三年十月相続

七代孫兵衛

明治二十一年十二月相続

八代

七代在世により稲垣和三郎

明治二十九年相続

九代

稲垣孫一郎

大正九年二月相続

昭和二十年八月終止

美濃屋保存京漆器 寄贈目録

寄贈者 稲垣孫一郎氏リスト

照宮内親王殿下御婚儀御調度和食器

(カラー図版)

番号	品名	員数	仕様	備考
1	雑煮椀	一客	黒ふた内朱(太陽の意) 松に梅花蒔絵	東久邇若宮若松の宮と申し上ぐ 照宮様紅梅の宮と申し上ぐ旨承りての意匠
2	吸物椀	一客	黒ふた内銀粉だみ(月の意) 松に梅花蒔絵	
3	煮物椀	一客	溜塗松皮菱透絵	

番号	品名	員数	仕様	備考
4	小吸物椀	一客	梅花蒔絵	以上四種の椀揃共箱(桐)入
5	会席膳	一客	内黒塗梅花蒔絵 隅丸形銀縁	以下御テーブル上使用 二の膳共箱入
6	二の膳	一客	溜塗裏黒塗	
7	脇引(膳)	一客	同右	
8	蒸し茶碗台	一客	溜黒塗分け	脇引、むし茶碗台、茶台 三種共箱入り
9	茶台(ふた付)	一客	同右	
10	飯器(杓子添)	一組	同右	木箱入
11	飯器台	一個	同右	"
12	酒器(提子)	一個	溜塗松に梅唐草蒔絵	"

椀類

番号	品名	員数	仕様	備考
1	煮物椀(吸物椀)	一客	外寄せ木透絵塗、蠟色 仕上げ黒味とする	大正期を代表する作品をと稲垣和三郎意匠指導 十余年後二十客完成 後年大原孫三郎氏受蔵 空前絶後の名品也 蒔絵・魚野自醒(カラー図版手前)
2	煮物椀(〃)	一客	外黒蠟色塗無地 内岩に蒔蒔絵	
3	煮物椀(〃)	一客	外独楽に寿文字蒔絵 内総雲蒔き平目地	
4	煮物椀(〃)	一客	総うるみ朱塗 芹蒔絵(名物椀に倣う)	
5	煮物椀	一客	かぶせ蓋 総寄せ木塗	塗師 三木表悦(初代)

15	14	13		12	11	10	9		8	7	6							
吸物椀	吸物椀	吸物椀		吸物椀	四つ椀の内汁椀	四つ椀の内飯椀	煮物椀		煮物椀(吸物椀)	煮物椀	煮物椀	煮物椀						
一客	一客	一客		一客	一客	一客	一客		一客	一客	一客	一客						
黒地 外に鶯宿梅蒔絵	黒地 端反り形外部金欄手透 繪	黒地内外共しのぶぐさ 蒔絵(形は食初椀)と 云う		内鶯宿梅絵巻繪 外黒無地	外あじさい朱漆繪 黒塗地	外あじさい朱漆繪 黒塗地	外黒蠟色無地 内研出し霞蒔絵 切金入 入念仕上げ		外黒地金線に一羽鶴 蓋見返し金朱研出 日の出蒔絵	内梅花蒔絵 外黒地金線に縁無地塗 分け	椿花蒔絵 外黒はじきと縁無地塗 分け	溜塗 外かるき挽目、総木地	中国風文様研出透き絵 大正初年の作(推定)					
	中々好評なりし	歌枕による意匠この他 例あり		ふっくりした形、春に ふさわしく蓋をとりて 内蒔絵の見事さを賞 味さるる梅の意匠好評 ありし作			当方も苦勞せし体験 あり 塗師 三木表悦(初代) 蒔絵師 本田李泉		納入後御使用の節ふ たと身、如何としても 離れず、再三御持たせ あり	優雅、軽快な秀作 薄手塗仕上げ塗分け とて味のある意匠特色 あり			蒔絵師 三木玉真					
32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16		
蕎麦椀(かけ付)	煮物椀	平椀	平椀	煮物椀	煮物椀	煮物椀	煮物椀	平椀	煮物椀	同右	四つ椀の内飯椀	平椀	平椀	吸物椀	吸物椀	吸物椀		
一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客		
外黒とうるみ朱塗分け 他は黒漆塗 入	外ろくろ目 三筋朱漆	富貴長春蒔絵 総うるみ朱塗	外あじさい朱漆繪 黒塗	外挽き目拭き漆 内黒塗	朱・黒塗分け 外面取り	内黒桜と楓蒔絵 内朱刷毛目塗	外根来式朱塗 内黒地網蒔絵	外挽き目 目はじき塗 内黒塗	内黒地光琳梅花蒔絵 外根来式朱塗	外はつり目黒目はじき 塗	同右	総朱塗 外黒漆網繪 溜塗内黒	竹挽きもの 外木地	蓋見返し藪柑子蒔絵 外うるみ朱内黒塗 さ蒔絵	内黒蓋見返ししのぶぐ さ蒔絵	外青漆刷毛目爪紅塗 外黒蓋見返ししのぶぐ さ蒔絵	桐木地 外木地溜塗 内黒稻穂蒔絵 黒塗 外にしのぶぐさ 蒔絵	吸物椀に桐木地を用 うること少なし
			10、11と組みの品			春秋の意												

51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33											
四つ椀の内飯椀	煮物椀(雑煮椀)	吸物椀	吸物椀	吸物椀	煮物椀	煮物椀	煮物椀	吸物椀	吸物椀	煮物椀	煮物椀	煮物椀	煮物椀	煮物椀	煮物椀	煮物椀	平椀	煮物椀											
一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客											
色漆独楽塗	ろくろ目 松に鶴亀錫蒔絵	内外とも稲穂蒔絵	黒塗 内桐唐草鳳凰蒔絵	黒塗 うら白蒔絵	黒塗 黒塗内部梅鉢蒔絵	端反り形 朱漆梅花ちらし	時代黒刷毛目塗 黒塗 梶の葉蒔絵	内黒塗・松かさ蒔絵 外ろくろ目うるみ朱塗	蒔絵 外挽き目拭き漆 秋草	石州形(俗称) 外挽き目拭き漆	黒真塗	総朱漆塗大形 総朱刷毛目塗	洗朱はけ目 茜朱塗り分け身黒(蓋)	総うるみ朱刷毛目塗 内黒漆	外挽き目拭き漆	牡丹蝶蒔絵 黒塗地	外溜塗 内黒塗	外拭き漆(挽目あり)											
		同右	明治期の作か	昭和初期並品			長寛作に倣うか						日の出椀と称す 雑煮椀に用う			明治時代中期か													
70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52											
吸物椀	煮物椀	煮物椀	吸物椀	うなぎ椀 煮物椀	煮物椀	煮物椀	吸物椀	煮物椀	小丸椀	うなぎ椀	吸物椀	吸物椀	吸物椀	煮物椀	煮物椀	蕎麦椀	吸物椀	四つ椀の内汁椀											
一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客	一客											
端反り面取り	内黒塗	外肩面取り糸目木地溜塗 (せんすじ)と云う	黒真塗	内黒塗	外寄せ木塗	総朱地溜塗	かぶせ蓋	薄手端反り黒塗	うるみ朱内黒	薄手端反り木地見せ	黒真塗	天龍寺形(俗称)	蓋面取り黒真塗	黒真塗利休好	内黒塗	外木地溜塗	内黒塗	外総糸目うるみ朱塗	面取り端反り青漆爪紅内黒	うるみ朱塗黒塗り分け 薄手外糸目	黒真塗	端反り薄手	薄手黒真塗	内黒塗	外ハツリ目春慶塗	箱漆絵松竹梅	同右	黒地	51と入子 昭和十八年 ビルマ、 パーモ長官来日の記 念として食器一揃納 品(文書参照) 塗師 三木表悦(初代)

番号	品名	員数	仕様	備考
83	大平椀(うなぎ椀にも)	一客	外処々挽目入溜塗内黒塗	
82	うなぎ椀	一客	かぶせ蓋外拭き漆内黒塗	
81	うなぎ椀	一客	碁笥ぞこ外挽目はつり目塗は同右	
80	うなぎ椀	一客	少しの違いあり碁笥ぞこ右同様	
79	うなぎ椀	一客	かぶせ蓋碁笥ぞこ外拭き漆内黒塗	うなぎ椀は少しくだけた趣きあり
78	時代椀	一客	端反り形	城ヶ端作風
77	時代椀(雑煮椀)	一客	箔色漆絵	
76	吸物椀	一客	端反り形	
75	煮物椀	一客	錆付け研ぎ上げ(中塗下まで)	製作途中参考品となる
74	煮物椀	一客	外縁うるみ朱他は黒塗分け	
73	吸物椀	一客	外拭き漆内黒塗	
72	煮物椀	一客	碁笥ぞこ	日の出椀
71	吸物椀	一客	端反り	長寛風か

17	大青海盆	一面	布張り貫きうるみ朱塗強い肴器などにあてる	大原孫三郎氏筆即興色漆絵 入洛の
16	懐石膳	五客	墨蹟入拭き漆仕上げ	老師箱書付
15	炭斗	一個	手提げ形 春慶塗	
14	緑高 五段重	一組	折り曲げ春慶塗	天龍寺前管長
13	丸盆	二枚	見付ろくろ目	関精拙老師墨蹟(五種)
12	丸盆 三ッ入り	一組	うるみ朱黒塗分け	
11	丸盆	二枚	黒真塗(紐付)	
10	飯器 杓子付	一組	外挽目ふたつまみ付	同右
9	熨斗竹(強い肴用)	一個	春慶塗分け	明治初期 青野伊助作
8	湯桶・湯の杓子	五客	松葉透絵	同右
7	引盃・台付	一組	黒塗	塗師 三木表悦
6	小吸物椀(箸洗い椀)	五客	かぶせ蓋ろくろ目塗分け見返し松葉絵	松葉椀の称あり
5	懐石膳	五客	縁折曲げ隅切り形	塗師 三木表悦
4	懐石膳	三客	極少々大	同右
3	懐石膳(鉋目折敷とも)	五客	縁折曲げ隅切り見付鉋目木地溜塗	木地師 山口善吉
2	懐石膳	二客	黒真塗	同右
1	小丸四つ椀(飯・汁入り)	五客	利休好	塗師 三木表悦(初代)

番号	品名	員数	仕様	備考
3	色紙箱	一合	桐木地溜塗 箱透絵	蒔絵師 迎田嘉亭
2	色紙箱	一合	桐白木(塗加工無し) 彩漆粉蒔絵	昭和十年代はじめ 木地師 山口善吉 蒔絵師 山田樂全(二代)
1	料紙文庫	一合	唐櫃形、神代杉杣洗出し 時代黒脚 内黒塗	明治末年〜大正初年 作 明治末年〜大正初年

料紙文庫類

番号	品名	員数	仕様	備考
6	香炉盆	一面	桐白木丸形 三っ足付 (白木のままして仕上り)	竹内栖鳳家記念試作
5	香炉盆	一面	黒真塗	大正初期作
4	香炉盆	一面	長手入隅形 高台付 四方入隅形 額縁式	孫一郎案
3	香炉盆	一面	木瓜形 見付うるみ朱ふち黒塗 分け	孫一郎案
2	香炉盆	一面	四方入隅形 見付布目溜塗透絵 ふち黒蠟色塗分け	蒔絵師 迎田嘉亭 塗師 三木表悦(初代)
1	香炉盆	一面	黒蠟色塗 長手入隅形 小足付	孫一郎監作 木地師 岩井音次郎 塗師 三木表悦(初代)

香炉盆類

18	大清海盆	一面	松生き節千遍摺り	砌 木地師 大崎庄平 塗師 井上清太郎
----	------	----	----------	---------------------------

番号	品名	員数	仕様	備考
4	大徳寺盆	一面	溜春慶塗 見付もみじ塗透絵	大徳寺伝来の型による称
3	大円盆	一面	栃 見付挽き目 青漆塗	木地師 井上清太郎 塗師 井上清太郎 木地師 中原常二郎 (葛川貫井住)
2	大円盆	一面	松平遍拭き漆	木地師 大崎庄平 塗師 井上清太郎
1	山道盆	一面	縁曲げもの 樺木地 見付如輪杏 千遍拭き漆	縁上端山道形 木地師 山口善吉 塗師 井上清太郎

円盆類

番号	品名	員数	仕様	備考
4	金封盆	一面	木地溜塗、雲龍漆絵	孫一郎案
3	進物盆 小(金封盆)	一面	黒塗 隅丸形見付紗張り	
2	進物盆大	一組	隅丸形 黒真塗	
1	進物盆	一面	銀縁 桑木地拭き漆	昭和十年頃

進物盆類

8	硯箱	一合	黒塗、銀沃懸	
7	硯箱	一合	外へき目 春慶塗	
6	小文庫	一合	内栓木地 春慶塗	
5	文箱	一合	桐拭き漆 紐付	昭和十二年創作
4	短冊箱	一合	桐拭き漆	短冊保存用深形箱入

番号	品名	員数	仕様	備考
1	三つ組朱盃(三つ重)	一組	総松唐草蒔絵	昭和初期 塗師 三木表悦 蒔絵師 迎田嘉亨
2	平形朱盆(やや小)	一口	亀に渦の文蒔絵	昭和初期
3	平形朱盆(やや大)	一口	亀に流水文蒔絵	昭和初期
4	朱盆	一口	高蒔絵紋入	明治中期
5	陶漆猪口	五客	道八窯 外朱刷毛目漆塗	和三郎箱書
6	吸物膳	五客	江上瓊山漆蒔絵付 糸巻形塗分け	和三郎好み
7	吸物膳	二客	隅丸胴張形 見付留ふち黒塗分け	大正初期
8	会席膳	一客	入隅形足付 溜塗	昭和十年頃 孫一郎案
9	大長手盆	一面	見付松皮菱黒溜塗分 ふち竹張り金具付	明治末 松竹梅の意 和三郎好 入念作
10	猪口	六客	5と同様	和三郎好
11	徳利	一對	陶漆試作	昭和初期

会席(宴席)家具

7	特大円盆(丸額とする)	一面	木地のままろくろ師の技を見る 彩漆能画	孫一郎試筆
5	大円盆	一面	溜春慶塗	孫一郎案
6	みの屋盆	一組	彩漆塗り分け かぶせ蓋 松 千遍拭き漆	煎茶器局(急須・茶碗・茶托)その他を組 みて容器とし、ふたを 盆とす

番号	品名	員数	仕様	備考
1	天狗盆	一口	張貫乾漆朱塗	昭和初年 遠坂宗仙一世の代表作
2	猪口盆	一口	同右 乾漆ねじ梅 朱塗	七代孫兵衛愛蔵 同右にや 銘無し
3	猪口盆	一口	橙 内漆にて固め塗加 工箔おき	鳥居祝次作 明治末頃
4	猪口腰提げ盆	一口	乾漆 陶に模す	八代和三郎蔵品 明治中期

盆

番号	品名	員数	仕様	備考
1	広蓋	一面	隅丸 黒蠟色塗 海松貝蒔絵	蒔絵 山本利兵衛 結納目録の台、九代孫 一郎結婚の際用う 特別入念作
2	饅頭盆 入子	一組	四方隅丸形黒蠟色塗 松唐草隅金具式蒔絵	新婦親類挨拶の節、腰 高饅頭(五ヶ)包みて その台に用う 蒔絵師 山本利兵衛 極入念作
3	四段組重	一組	胴張り隅丸形 うす手蠟色外時代織文 散らし	七代愛用品と思う
4	四段組重	一組	角形 外黒口線蒔絵 内朱塗ふち金沃懸	山本利兵衛入念別作 山本家蔵の品を七代 の頃譲り受けしものと 考えられる

稲垣家祝儀用蔵品

青漆塗漆箔絵

番号	品名	員数	仕様	備考
6	小形盃	一口	腰提げ用金具付 朱塗 内敷松葉蒔絵	八代和二郎蔵品 明治中期参考品
5	盃台	一個	根来朱	長寛箱書あり、参考品
1	唐物式香合	一合	方形羅張り うるみ漆 布目摺り 縁取り小丸七宝つなぎ	羅は天皇の冠緋を拝 領の由
2	梅花形香合	一合	外黒松梅唐草 七宝彩式とき出し	遠坂宗仙一世の精作 青野伊助の力作 同人は宗仙の弟子に て後に遠坂家を守る
3	松皮菱形香合	一合	笹匏目入 黒地梅蒔絵 松竹梅の意匠	明治初期入念別作 七代愛好品と覚ゆ
4	丸形香合	一合	甲中央獅子蒔絵 甲面外廻りより側面不 正形	稲井玉甫二代目(京都 住)
5	丸形香合	一合	金抜金張研出蒔絵 黒漆外石地蠟色塗	東京白山松哉師の許 にて修行中の代表作
6	丸形香合	一合	比寿南山意匠 蒔絵に彩漆繪	青野伊助作 迎田秋悦作(特別作 品)
7	六稜形香合	一合	黒地甲盛桐竹蒔絵 天皇御衣香炉染御袍の 文様より	稲垣まさ刀自(六代 室)喜寿を祝して贈呈 を受く
8	兎形香合	一合	木彫雪うさぎ意匠 彩色	迎田秋悦作 六稜は高御座に因る
9	梅花形香合	一合	木彫 素材は梅樹にや	迎田秋悦作 御題朝晴雪の意匠 秋悦氏の軽妙な一面 を示す
10	百合根香合	一合	木彫	八代和二郎愛好品 石本暁海作(特別作) 八代の好み 稲垣家 初代百回忌記念とし て指示の作
11	菊花形香合	一合	竹材彫刻外拭き漆 内黒金平目地	大正初期 八代愛好品
12	長角形香合	一合	黒地萬歳文字蒔絵 縁纏緋色漆繪研出し	大正四年、天皇御大典 を祝し、八代の好みに ての作
13	丸形陶漆香合	一合	外朱漆地烏蒔絵 内銀箔	日月幡に因み右同様 の作
14	白形香合	一合	挽き目外うるみ朱 内絵(古代月の意文) 内金箔	八代和二郎大正四年 兎歳新春贈りものとし て考案
15	丸形香合	一合	松 銀ふち 千遍すり漆	彩漆繪は迎田秋悦作 漆工 井上清太郎
16	丸形香合	一合	松小形 千遍すり漆	同右
17	橘形香合	一合	布目朱塗銀沃かけ縁 内青海平目風研出し	中川蟬堂入念作 八代愛蔵品
18	水鳥形香合	一合	張り貫き乾漆 中国風意匠 黒塗 (加工半ばにや)	参考品
19	俱利形香合 大	一合	湧に岩	参考品
20	俱利形香合 小	一合	雲文 唐物風	参考品
21	堆朱香合	一合	唐物写し人物文	是閑作(大正年代新潟 住と記憶す)
22	丸形香合	一合	唐物風彩漆文	参考品 俗に「天川」との称あ り

香合

23	堆朱丸形香合	一合	小丸形・雲文	参考品
----	--------	----	--------	-----

茶箱	
番号	品名
1	携帯用茶箱皆具 抹茶碗 棗 茶釜筒、茶巾筒 茶杓 茶箱
員数	仕様
一揃	樂焼風漆技仕上げ 筒形一閑風張出瓢変り 塗、竹自作春慶漆加工 象牙製 外段紙張(一閑風)溜 春慶、古銭さび上げ仕 上げ 蓋内団扇形に蒔絵余白 裂地張り 携帯用として仕覆添 他に付属品あり
備考	神東丘茶人にて漆技 を究む。不入と号す。 各品銘を朱漆にて記 す 七代、八代重宝として 愛蔵 幕末より明治初年の 京都の風雅をしのぶ最 秀作

抹茶器			
番号	品名	員数	仕様
1	抹茶碗	一口	乾漆楽焼風
2	抹茶碗	一口	乾漆黒楽風
3	抹茶碗	一口	河村精山窯 (迎田秋悦の親友)
備考	遠坂宗仙特別作 宗仙は数内家漆匠 同右 七代愛蔵 上絵 迎田秋悦筆(余 技) 八代和三郎愛蔵		

棗	
番号	品名
1	中次棗
員数	仕様
一合	石地黒蠟色塗
備考	塗師鳥居莊祝作 明治末年より大正期

番号	品名	員数	仕様	備考
2	茶托子	五客	松ふき漆 天龍寺峨翁老師真筆 竹黒絵 桃の意 朱漆に葉乾漆蒔絵	昭和十五年頃作 赤塚自得氏門下展 於大阪三越出品作 自芳作
11	面中次棗	一合	外うるみ朱地螺鈿 梅花ちらし	参考品
10	中次棗	一合	竹、内部木部とす	八代愛蔵
9	甲赤棗	一合	黒真塗 蓋朱、身黒	内・底中塗まで
8	大棗	一合	飛来一閑作	武者小路千家々々元(昭 和初期)花押あり
7	中棗 外 住吉 古歌 立上り竹唐草蒔 絵 仕覆入	一合	梅木地 外千遍摺り漆 内黒松竹梅の祝意	指物師 木葉作 九代孫一郎愛蔵 塗師 鳥居莊祝作 飛来一閑作
6	中棗友千鳥蒔絵	一合	黒地外群千鳥つけ描 蒔絵 仕覆入	工 山本派を代表する名 工
5	吹雪形棗	一合	黒	特別入念作 八代和 三郎秘蔵品
4	金林寺形棗	一合	黒	蒔絵師 江馬長閑特 別作 大正昭和初期
3	平棗	一合	石地黒蠟色塗 乾漆黒	三郎秘蔵品
2	中平形棗	一合	同右	特別入念作 八代和 三郎秘蔵品

茶托子	
番号	品名
1	茶托子
2	茶托子
員数	仕様
五客	松ふき漆 天龍寺峨翁老師真筆 竹黒絵 桃の意 朱漆に葉乾漆蒔絵
備考	昭和十五年頃作 赤塚自得氏門下展 於大阪三越出品作 自芳作

3	茶托子	五客	彩漆草花蒔絵	同右 自適作
---	-----	----	--------	-----------

小飯器				
番号	品名	員数	仕様	備考
1	つまみ蓋飯器	一合	挽き目生地溜塗	葛川村途中挽き物 明治・大正・昭和初期 まで日常用として多数 製作

小形飯器				
番号	品名	員数	仕様	備考
1	飯器小形	一合	丸形かぶせ蓋つまみ付 外挽目生地溜塗	滋賀県比良北山麓途 中 木地師 中原喜一作 みの屋盆(茶器局)そ の他ろくろ物一式 の屋専属

小菓子器				
番号	品名	員数	仕様	備考
1	小丸形菓子器	一合	外黒漆地 銅線入彩 漆(七宝技法による) 内蒔絵入	青野伊助一世の代表 作 明治初期八代和三郎 特に愛蔵
2	六角形小菓子器	一合	槻赤漆縁銀 (正倉院厨子に因む)	昭和初期 京都千総 西村家祝儀引出物の 試作品
3	小丸板ふた小菓子器	一組	入子身布目 生地溜塗	大正期
4	平形小菓子器	一合	松挽き目拭き漆	大正・昭和初期頃

俗に「やんぼ」と云う

干菓子器				
番号	品名	員数	仕様	備考
1	輪華形干菓子器	一合	黒蠟色塗	蒔絵師 迎田秋悦作
2	丸形干菓子器	一合	縁蝶唐草銀蒔絵 彩漆粉蒔絵	八代和三郎好み愛蔵 蒔絵師 三木玉真作
3	器 四方隅丸干菓子	一合	縁銀沃懸有職文様 黒地黄漆羊齒透き絵 縁銀沃懸	大正・昭和初期頃 物加波棟佳作 江馬長閑門下 昭和 初期
4	丸形干菓子盆	一面	極うす手、露草透き絵	同右作
5	丸形干菓子盆 (飾り盆)	一面	梅蒔絵(鉛粉使用) 縁朱漆	蒔絵師 平館曾作 後年京都代表作家 大正末、昭和初頭、当 時の新傾向作
6	丸形干菓子器	一面	桐うす挽銀縁	本野精吾先生筆
7	青海形干菓子器	一面	白木に水墨松樹画	昭和十年頃
8	四方形干菓子器 (四方盆と称す)	一面	桐 白木に水墨竹画	同右
9	四方形干菓子器 小形	一面	黒真塗	塗師 塚本正三入念作 昭和初期 三木表悦 門下
10	干菓子器(青海 盆)	一面	黒真塗(茶入盆)	大正期
11	四方形干菓子器	一面	乾漆 布張貫き	塗師 鳥居莊祝作
12	丸形干菓子器	一面	溜漆塗	八代愛蔵
13	四方形干菓子器	一面	桐飽目 生地溜塗 籠胎	八代和三郎好み
			黒地朱存星	同右 愛蔵参考品
			入隅布張り貫き	
			黒地朱存星	同右(茶入盆)

菓子鉢

番号	品名	員数	仕様	備考
1	鉄鉢形菓子鉢	一口	うるみ朱布目塗	明治末大正初期八代和三郎好み
2	鉄鉢形菓子鉢	一口	松銀縁摺り漆	同右
3	白形菓子鉢	一口	春慶塗(兎墨絵(透き絵)) 銀いかけ	卯歳に因み月の兎の意 匠 孫一郎好み
4	茶事用菓子鉢	二口	黒挽き目色漆絵 絵かわり	昭和初年 佐野長寛作を倣す

銘々盆(菓子盆)

番号	品名	員数	仕様	備考
1	銘々盆	五客	黒蠟色塗	山本派蒔絵入念作
2	四方形吹上式銘々盆	五客	縁七宝ちらし蒔絵 へぎ目黒爪紅	明治大正初年頃 青野伊助作風
3	丸形銘々盆	五客	雅趣ある仕上げ 布張貫き	大正初年頃上作
4	丸形銘々盆	五客	溜塗	八代和三郎好み
5	丸形銘々盆	五客	春慶塗	昭和十年頃
6	丸形銘々盆	五客	水墨画絵替り透絵 榲木地極うす手挽上げ 拭き漆	本野精吾先生筆 大正初期
7	一枚もの銘々盆	七種	松木地挽き目 銀縁	八代和三郎好み 同右
1	花鳥蒔絵			明治末大正初年当時 新意匠
2	黒布目塗椿花蒔絵			同右 上作品
3	黒蠟色塗萩蒔絵			同右
4	木瓜形菊花蒔絵朱漆			昭和初期 孫一郎意匠 蒔絵師 本田季仙作
5	木瓜形黒紙はだ塗			同右

6	(一閑)八垂律漆絵 小形花紅葉透絵	同右
7	小形黄漆地色漆菊 花	同右

小銘々盆

番号	品名	員数	仕様	備考
1	のし竹銘々盆	九面	のし竹木地溜塗	明治初期上作
2	丸形小銘々盆	五面	墨絵松葉透絵外黒塗	青野伊助作と覚ゆ (正月祝儀用品)
3	摺り鉢小銘々盆	五客	薄手作外溜 内黒真塗	明治末・大正初期 (同右)
4	丸形小銘々盆	五客	松拭き漆花紅葉絵 溜塗にて描く 朱刷毛目塗	昭和初期 孫一郎案 (味噌あえもの等に用 う)

食籠

番号	品名	員数	仕様	備考
1	食籠	一合	入隅形合口	意匠孫一郎絵自筆
2	食籠	一合	外朱・内黒真塗 椿箔絵	木地師 山口善吉
3	食籠	一合	裏形外溜塗	塗師 三木表悦
4	食籠	一合	塗師 清水清齊入念作	
5	食籠	一合	丸形合口銀縁 外青漆内黒真塗	大正初期作
6	大平形食籠	一合	碗形外溜塗 内黒真塗	明治年代作
7	食籠	一合	哈形外挽目溜塗 内黒銀平目地	昭和初期作
8	食籠	一合	覆蓋 総布目 溜塗	大正初期作

点心食器揃

番号	品名	員数	仕様	備考
1	信玄弁当	五組	外うるみ朱刷毛目 内黒塗	大正時代
2	長手盆	五客	木地松松はぎ合せ 丸縁塗分け	大正時代 和三郎好み 瀟洒な趣向の代表作
3	箸おき	五客	紅白梅一刀彫風漆塗	孫一郎案 昭和十年頃

点心用縁高

番号	品名	員数	仕様	備考
1	手提形縁高	五客	桧木地鉋目割り蓋 蓋内水墨画絵替り 春慶塗	京春慶塗入念作 昭和十年頃 水墨画本野精吾先生筆
2	角丸形縁高	一客	一閑風紙はだ表 内黒朱漆松喰鶴絵	塗師 三木表悦作 蒔絵師 三木玉真作 同右
3	入 曲物縁高 桜皮	一客	かずら 生地溜塗	大正初年頃 木地師 山口善吉作

蕎麦具

番号	品名	員数	仕様	備考
1	蕎麦椀	十客	挽目ハツリ目かぶせ蓋 懸子付(薬味用)	大正期和三郎好み上作
2	丸盆	五客	ろくろ目 千遍すり漆	木地師 森田亀之助作 上作 大正期和三郎好み特 専用)作

巻煙草具

番号	品名	員数	仕様	備考
1	巻煙草箱	一個	光琳形茄子にトンボ蒔 絵 蒔絵意匠 柴田是真作 を做う	蒔絵師 魚野自醒作 京都山本家門下 後 に東京赤塚自得に学 び帰洛、八代和三郎の 援助を受く 莫セットと云う
2	巻煙草具	一組	光琳形黒無地(蒔絵用) 隅丸形甲面叩き塗 灰皿付	

マッチ箱のケース

番号	品名	員数	仕様	備考
1	マッチ箱ケース	二個	槻赤漆 正倉院文様蒔絵	昭和初年

禅宗用品

番号	品名	員数	仕様	備考
1	応量器	一合	朱塗	創業時より禅宗各寺 院に納入す
2	椀子	二種	朱塗 部品 禅家々具揃の内	明治時代

彩漆画色紙

番号	品名	員数	仕様	備考
1	金地色絵彩漆画	一枚		大原孫三郎氏の意向 により、洋画家(大原 家美術顧問)児島虎次

塗師 井上清太郎作

			郎先生入洛の砌多数 みの屋作品に彩漆画 を執筆す、その折の作 品也 大正十年作

団扇台(うちわ添)			
番号	品名	員数	仕様
1	舟形うちわ台	一個	春慶塗 ふち銀沃懸
2	うちわ	二枚	鏨木清方 版画 奥村土牛
			備考 昭和初年孫一郎案 木地師 岩井秀次郎作 塗師 大野竹二郎作 三越百貨店美術部よ り到来

ラジオ受信機カバー			
番号	品名	員数	仕様
1	ラジオ受信機カ バー	一個	外紗張り黒布目摺り上 げ 色漆蘭花絵
			備考 本野精吾先生来訪の 砌 即席画 昭和十年代 孫一郎案 第二次世界大戦下 防空警報を聞きしラジ オ難しき時節の裡何や ら心持に余裕ありし

蒔絵手板			
番号	品名	員数	仕様
1	蒔絵手板	一揃	菊花御紋章 他蒔絵仕上げ種々
			備考 稲垣家々伝 蒔絵師 山本利兵衛作 明治初期の作 (又は江戸期末年)

書棚戸前			
番号	品名	員数	仕様
1	書棚戸前	一枚	布目摺り上げ地竹に 唐松蒔絵
2	書棚戸前	一枚	布目摺り上げ地 唐松蒔絵
			備考 大正初期八代和三郎 好み 蒔絵師 迎田秋悦作 同右

硯箱の部分			
番号	品名	員数	仕様
1	硯箱の部品	二点	蒔絵懸子上作 黒塗懸子
			備考 参考品

花台(しき板)			
番号	品名	員数	仕様
1	花台	二枚	彩漆試作品
			備考 昭和初期 孫一郎考案

鶯籠の台			
番号	品名	員数	仕様
1	鶯籠台	一個	外朱内黒塗
			備考 昭和初期 木地師 山口善吉作 塗師 三木表悦作 三井家納入見本

香炉盆			
番号	品名	員数	仕様
1	丸形香炉盆	一個	唐物風龍文 存星技法
			備考 参考品

美濃屋出入の工人達

美濃屋出入の主な工匠名

塗師

遠坂宗仙 青野伊助 岡田表寛 田中表阿弥 鈴木表朔 三木表
悦 鳥居莊祝 岩村貞藏 中西表瑞

蒔絵師

山本利兵衛 富田誠 戸嶋光孚 吉田金年 迎田秋悦 江馬長閑
三木玉真 山田樂全 上原春光 迎田喜亭 岡本松峯 奥村霞城

本田季泉

木地師

山口善吉 岩井音吉 渡辺弥三郎

轆轤師

森田亀三郎 大崎庄平 中原喜一

『大正五年七月十六日

釋尼妙阿（八代室）葬儀諸扣（葬儀参列工人）

「密葬并葬式取持方

山元締

山菓子方

吉田平三郎殿

木村秀雄殿

岡田表寛殿

高橋表清殿

中大路季嗣殿

堀井寅吉殿

小林喜一郎様

山帳場

富田 誠殿

迎田秋悦殿

吉田長春殿

江馬長閑殿

鈴木表朔殿

中村幸二郎殿

岩井音吉殿

大橋庄兵工殿

川那辺友次殿

平井岩次郎殿

三木己之助殿

林正太郎殿

岩村貞藏殿

村岡宗三郎殿

岡田末吉殿

森田信吉殿

林米次郎殿

八木亀之助殿

岡田表次殿

品川千吉殿

木下秀次郎殿

奥井伝造殿

木下甚吉殿

佐藤国藏殿

山取持

岡本松峯殿

吉田光村殿

古市卯之助殿

小沢貞逸殿

田中表阿弥殿

高橋清助殿

片岡岩次郎殿

渡辺弥三郎殿

山口善吉殿

井上清太郎殿

清水藤楠殿

中西表瑞殿

杉山芦流殿

森川定之助殿

留守帳場

石本鏡舟殿

石取持方ハ総テ

職工方也

附言

表帳場モ右職工方ニテ

取持タレタリ

『大正九年二月 美濃屋八代和三郎葬儀の際の写真 於東山袋中庵』

番号	職 種	氏 名
1	美濃屋九代	稻垣孫一郎
2	同 七代	稻垣其外
3	九代伯父	佐野喜三郎
4	番 頭	岩井清七
5	蒔絵師	吉田金年
6	同	迎田秋悦
7	同	江馬長閑
8	同	三木玉真
9	同	山田樂全
10	同	上原春光
11	同	魚野自醒
12	同	岡本松峯
13	同	岩村真次郎

松宮庄吉殿
川瀬千太郎殿
松本吉之助殿

提灯持
店員 寛治
三木巳ノ
弟子 杉森

35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14

同 鋳師 同 同 木地師(挽物) 同 同 木地師(板物) 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 塗師 同 同 同 同 同 同

長坂吉栄 片岡岩次郎 中村幸三郎 大崎庄平 森田亀之助 渡辺弥三郎 岩井音吉 山口善吉 新山静光 品川千吉 井上清太郎 岡田表次 岩村哲斎 三木表悦 鈴木表朔 岡田表寛 吉田光村 今井竺斎 中大路秀嗣 福家猛夫 奥村霞城 迎田嘉亭

38	37	36
同	木箱師	表装師
松宮庄吉殿	小沢貞逸	松宮庄吉
塚本正三殿	林末次郎	
川瀬茂殿		
古市古悦殿		
土井和吉殿		
岡本松峯殿		
三木玉真殿		
魚野自醒殿		
迎田嘉亭殿		
上原春光殿		
三木表悦殿		
江馬長閑殿		
鈴木表朔殿		
迎田秋悦殿		
出入方之部		
三崎小平殿		
中西表瑞殿		
井上清太郎殿		
山口善吉殿		
品川千吉殿		
森田亀吉殿		
本田利吉殿		
大崎庄平殿		
岩井秀太郎殿		
大野亀次郎殿		
小澤貞逸殿		

昭和七年九月二十六日
 釋尼妙清(七代室)葬儀諸扣(葬儀参列工人)
 「葬式参列者」

工人略歴

『京漆器・近代の美と伝統』京都漆器工芸協同組合編を参照した。ただ同書では美濃屋での取材をしていないので美濃屋での製作については冒頭寄贈目録を参考としてほしい。記述が少ない工人はむしろ美濃屋を中心に活躍した人達であるとの解釈ができる。

M・明治 T・大正 S・昭和

青野伊助 塗師・蒔絵師

明治初年の人

稲井玉甫（初代）（甫） 蒔絵師

M9生 S5・7・26没 特技は白漆の使用、陶器の白釉の再現を考えていた（白漆の研究はT13頃に成功したという）。鈴木玉船に師事。鈴木長真門下の依田亀夫、市瀬音次郎、中島豊逸、三木玉真とは親しく常に行動を共にしていた。M30、漆工会青年部会員、関西府県連合共進会出品。T11、京漆器競技会（吸物椀部）二等賞。T13、漆器蒔絵競技会（一部）二等（呉州うつし菓子鉢）。T13、六趣園同人。T15、日本漆工会大阪展出品。T14、S3商工展褒状。

井上清太郎 塗師

品川千太郎に師事。摺漆を専門にし特に千辺摺に優れる。

今井竺齋 蒔絵師

北村春照に師事。江馬長閑の妻の弟。

岩井音吉 板物師

明治より大正期の人。

岩村哲斎（四代）（貞蔵）（吟雪） 塗師

M17・1・8生 S42・3・19没 源之助の息。堀内宗匠に茶道を学ぶ。M32、京都漆工青年会幹事。M35、第五回内国勸業博出品委員。M36、三府漆工青年競技会に優賞。M38、第七回全国漆工競技会にて皇后宮職買上。M42、全国製産品博審査員。M42・6、佳都美会設立以来T12解散まで幹事となる。T4、大正天皇即位大典に京都市その他より献上の賀表笺を制作。T6、T7、三園合同展出品。T12皇后陛下入内に際し調度品を制作。T13、佳都美会改称して京都美術工芸会（後に美工院と改む）設立と共に評議員。T14、漆器同業組合作家側評議員。T14、パリ万国裝飾博、銀賞。T15、美工院理事。S3、奨美会より大花車の髹漆依頼。S3、今上陛下即位大典に三重県より献上の瑞鳳扇用飾台及び容器を制作。S4、パリ日本美術展入選。S5、近畿漆工会委員。S18、工芸技術保存資格者（戦時特例）乙種一種。早くより高松工芸学校長より依嘱され、同校漆工科卒業生を多く門弟として指導。子規派の俳句に長ず。

岩村光真（真次郎） 蒔絵師

M18・4・15生 S20・1・10没 哲斎の弟。M38、美術工芸学校描金科卒業攻科二年在学。M41・4・S5・9、美術工芸学校描金科漆工科教員。M39、杉林古香、迎田秋悦、戸島光孚らと共に京漆園結成。T2、T3、農展入選 三園（京漆園、遊陶園、道楽園）合同展出品。佳都美村、京都美術工芸会、美工院会員。T4、御大典奉祝記念に京都市より献上の冠棚、文台硯箱制作（神坂雪佳案）。T12、東宮成婚記念京都市より献上の書棚を他5名と共に制作。T15、聖徳太子奉讃展出品。S9、商工展褒状。S10、京都漆芸会々員。S17、市展入選。S19、戦時中の芸術保存資格、乙種六級 蒔絵の他螺鈿に長じ桐木地に蒔絵と共に螺鈿を嵌入する等の作品がある。

上原春光（末吉 三次郎） 蒔絵師

M10・1・24生 S23・12・27没 三之助の息。M30、漆工会青年部（関西府県連合共進会出品）。M33、漆器蒔絵物競技会三等賞。M35、新古美術品展出品。T13、六趣園同人 漆器蒔絵競技会（裝飾品部）三等。T15、日本漆工会大阪展出品。S2、商工展入選。S3、工芸春草社同人。S5、聖徳太子奉讃展入選。夫人は迎田

秋悦の妹、娘は秋悦の養女。

魚野自醒（治朔 次作） 蒔絵師

M16・1・1石川県に生 山本利兵衛に師事、後赤塚自得（東京）に師事。日本工芸美術会委員、美工院、昭和工芸協会、六趣園会員。T8、日本漆工芸会々員。T14、漆工青年競技会審査員。T15、聖徳太子奉讃展入選 帝展、文展入選。S3、京漆園同人。S19、戦時中の丸芸資格、甲種二級。S10、京都漆芸会々員。S11、工芸展受賞（二〇〇円）。太平洋戦争中に石川県石川郡野々市村へ帰る。

江馬長閑（長治） 蒔絵師

M14・12・14大和郡山に生 S15・3・12没 M28、半年の間に祖父と両親を失う。大阪の榊蒔絵師小西春齋に師事し、後師匠と共に奈良へ移り三年を過ごす。後に岡田表寛の紹介で五代山本利兵衛に師事。その没後六代利兵衛と共に制作を続ける。六代利兵衛の没後独立。若年より五十嵐道甫、山本春正に私淑す。謡曲に長じた。T5・10、S5・9、美術工芸学校漆工科教員。佳都美村、京都美術工芸会、美工院会員。市展、工芸展審査員。帝展入選。T8、東宮立太子式に皇后よりお祝の文台、硯箱を製作（下絵神坂雪佳）。T12、東宮成婚記念に京都よりの献上の書棚を他の五名と共に制作。S5、聖徳太子奉讃展入選。S5、日本工芸美術会関西支部顧問。S8、天理教教祖殿の蒔絵を湯浅守一と共に製作。S12、京都工芸院幹事。宮内省依頼の硯箱、手箱等を多く作る（老松図重硯箱は宮内庁御物）。没後大和郡山洞泉寺に葬る。

大崎庄平 挽物師

輪島で修業し、大正末期に京都へ転住、戦時中に輪島へ帰る。技術は優れていたという。

大野竹二郎 塗師

M33・12・10生 亀治郎の息。S6、商工展褒状。S7、商工展入選。S56、桂離宮大修理に際し、床框、欄間等の塗の修理。六葉新造に従事。

岡田表寛（初代）（嘉左衛門） 塗師

T2・7・15没 75才 初代木村表斎に師事。M30・M31、京都褒美会依頼の書棚、文台、硯箱の下地担当。M31、漆工芸青年塗師部競技会審査員。M33、漆器蒔絵物競技会審査員。M45、競美会佳都美会第五回展出品。

岡本松峰（留次郎） 蒔絵師

五代山本利兵衛に師事。独立後初代鈴木表朔の作品の蒔絵を主に担当。T8、日本漆工芸会々員。T12、京阪漆工家小品展出品。T13、漆器蒔絵競技会無鑑査出品。

奥村霞城（亨） 蒔絵師

M26・1・23生 S12・10・16没 M44、美術工芸学校描金科卒岩村光真に師事。後船橋舟環（東京）に師事。M45、漆工青年競技会一等賞。T8、佳都美村。S4、美工院。T9、時習園。T15、五匠園。近畿漆工家協会会員。T8、T14商工展受賞。T2、新古美術展受賞。帝展特選。文展無鑑査。T15、S5、聖徳太子奉讃展入選。S5・10、S12・10、美術工芸学校漆工科教員。昭和大典記念博出品。国際美術展出品。S5、日本工芸美術会関西支部実行委員。S10、京都漆芸会々員。市展審査員。二条城附近で生れた為霞城と号す。

迎中秋悦（嘉一郎）（俳号乙童） 蒔絵師

M14大阪に生。S8・10・5垂水にて没 嘉兵衛の長男。M21、京都に転住。日本画を三宅呉暁に習う。M29、青年漆工芸会競技会五等賞。M30、第六回関西府県連合共進会出品（漆工芸青年部会員）。M33、漆器蒔絵物競技会二等賞。M36、第五回内国勸業博「敦盛図蒔絵手箱」を出品し褒状。M39、中沢岩太、浅井忠らの指導のもとに杉林古香、戸島光平、岩村光真らと共に「京漆園」を結成。M40、神坂雪佳指導の「佳美会」結成。新古美術品展、賞金二五円授与。M41、新古美術品展二等賞。M42、「佳美会」は「佳都美会」と改称。江馬長閑、神坂祐吉、上原春光、山田樂全、鈴木表朔、三木表悦、岩村鉄斎らと共に漆芸部門の中堅となる。T2、農商務省展にて三等賞二点。T3、農展三等賞（三木表悦と共作）と褒状。T4、亡父追悼作品展開催。T4、農展三等賞（秋悦案、秋悦表悦共作）及褒状。奨美会より宮内省

へ納める手箱三個を戸島光孚らと共に制作。T 5、農展入選。T 7、農展三等賞。T 8、三園合同展出品、阪急百貨店にて個展。T 9、聖徳太子奉讃展出品。T 10、赤塚自得 植松包美（共に東京）と共に展覧会開催。後に「蒔絵三作展」を開催（T 15）。T 11、京都漆工会第一回展出品。T 12、東宮成婚記念、京都市より献上の書棚他の五名と共に制作。T 13、京都美工院同人となり毎年展覧会に出品。山鹿精華、河村蜻山と共に美工院の三羽鳥と称される。又T 14パリ万博装飾博に農商務省より補助金を支給され蒔絵手箱を出品。T 15、後援者岸本吉左衛門のすすめもあり、持病喘息療養を兼ねて兵庫県垂水へ転住。「聖徳太子奉讃展」の代表委員、日本美術工芸会委員。S 2、帝展に第四部が開設され「玉蜀黍蒔絵飾棚」出品。その後毎年出品。S 3、一門及び関係者を集め「工芸春草社」を作り芦屋公会堂にて展覧会開催、帝展無鑑査。S 5、聖徳太子奉讃展出品 近畿漆工家協会（KILK）。S 6、帝展審査員。S 8、帝展審査員となり東京へ出発の朝急逝、東山二条西方に葬る。秋悦四兄弟は長兄秋悦より上原春光夫人、嘉亭、林文塘夫人である。T 4、「秋悦作品集」（芸艸堂）。T 10、「秋悦遺作集」（芸艸堂）。S 55、「迎田秋悦 嘉亭京蒔絵文様集」（淡交社）。

迎田嘉亭（鐘太郎） 蒔絵師

M 19・7・15大阪に生。S 36・3・4没 秋悦の弟。兄と共に父の指導を受け、後年十代中村宗哲が新町一条の家より武者小路へ移った時、その新町の家へ入った。中年以後は琳派の流れを受けた軽いものに特長を出す。歌澤の名取りで芝衛士を号す。T 11、「東京平和博」銀賞。T 12、京都美術工芸展受賞。T 14、商工展入選。T 15、「五匠園」結成。T 15、商工展褒状。S 3、工芸春草社同人。S 4、美工院同人。S 5、聖徳太子奉讃展出品 近畿漆工家協会幹事。S 7、S 8、帝選入選。S 9、日本工芸美術会委員。S 10、京都漆芸会々員。S 11、「蒼潤社」会員。S 15、二六〇〇年奉祝展出品。S 15、六趣園同人（奥村霞城没後）。S 19、戦時中芸術保存資格甲種三級。S 55、「迎田秋悦 嘉亭京蒔絵文様集」（淡交社）。

品川千吉 塗師

千太郎の息。T 14、漆器同業組合（工部）代議員。S 2、京都漆匠会会員。

鈴木表朔（初代）（旧姓 井上捨吉） 塗師

M 7、滋賀県安曇川町に生 S 18・9・14没 鈴木長真へ入夫したが、後髹漆に転じ二代木村表齋に師事。M 37、新古美術品展四等賞。M 42、伊勢大神宮の神宝の塗を担当。T 2、漆器同業組合新案展一等賞。T 2、御大典高御座、御帳台、万歳幡等の塗を担当。T 2、T 4、農展入選。T 5、内務省御用となる。T 8、佳都美村会員、漆器同業組合代議員。T 11、京都漆工会展出品。T 12、伊勢神宮の神宝の一部の塗担当。T 13、京都美術工芸会々員。T 15、美工院展（会員）出品。初代三木表悦とは特に親しかった。

田中表阿弥（旧姓佃） 塗師

S 47・4・5没 92才 二代木村表齋に師事。

塚本正悦（正三） 塗師

M 39・4・28生 初代三木表悦に師事。二代三木表悦の実兄。S 13、工美展入選。

遠坂宗仙（宗兵衛 幼名半四郎） 塗師

江戸末より明治初期の人。藪内流家元の出入りの塗師で、その茶器道具を作る。

戸島光孚（弥一郎 光阿弥） 蒔絵師

M 15・1生 S 31・3・29没 弥兵衛の息。弥兵衛が髹漆に専念した為、叔父新次郎に蒔絵を習う。日本画を竹内栖鳳に学ぶ。戸島清治郎と共に仕事をしていたが、清治郎の没後弟子達は独立し、光孚は漆絵は傾倒して行った。鯉を得意としその蒔絵作品も多いが、絵絹に色漆を薄めて日本画風に描いたものもある。大正末期より昭和初期にかけて京都の漆芸界では迎田秋悦、江馬長閑と並ぶ存在であった。帝展入選。二十才の頃二年間程東京に住む。M 35、新古美術品展二等銀牌。M 36、第五回内国勸業博入選二点。M 39、京漆園結成（迎田、杉林、岩村等）。M 40、新古美術品展 賞金二五円授与。M 42、業界誌「漆器界」発刊。M 42、新古美術品展三上幸三郎出品。蒔絵手箱の製作者として優等者賞金一万足授与。M 43、競美会々員。M

45、京漆園遊陶園第一回展（東京）出品。T 2、京都漆匠会々員。T 2、新古美術品展二等賞。T 2、農商務省主催第一回図案及应用作品展（農展）三等賞（沢田誠一郎案）及褒状二。T 2・6・1、新宅披露小品展。T 4、農展褒状。佳都美会小品展出品。T 4、奨美会より宮内省へ納める手箱三個を迎田秋悦らと共に制作。T 5、佳都美会展出品。T 6、三園合同第六回展出品以後毎年出品。青年漆工競技会審査員。T 7、漆器蒔絵展出品。T 8、漆器同業組合代議員。T 9、聖徳太子奉讀展出品。T 10、漆工青年競技会審査員。T 11、商工展三等賞。T 12、東宮成婚記念に京都市より献上の書棚、他の五名と共に制作。T 14、漆器同業組合作家側評議員。T 14、漆工青年競技会審査員。T 14、パリ万国裝飾博名譽賞。T 15、聖徳太子奉讀展委員。第一回工芸美術展出品。T 15・4、象彦の主催する京都美術蒔絵学校開校し、校長に就任したが、年を経ず退任。S 8、日本漆画院々長。S 8、昭和工芸協会理事。S 10、市美術展審査員。S 11、帝展入選。S 16、外務省献上の漆画額「神泉勇鯉」制作。S 19、戦時中の芸術保存資格乙種五級。

富田 誠 蒔絵師

M 6・5・16生 S 19・12・18没 幸七の長女の婿。M 20、富田幸七に師事。M 33、新古美術品展二等銀牌。M 43、新古美術品展審査員、神坂雪佳らと競美会を設立。M 43・5・T 5・10、美術工芸学校描金科教員。M 45、競美会佳都美会第五回展出品。T 2、新古美術品展出品奨励委員及審査員。T 6、漆器同業組合議員。T 8、日本漆工会々員。T 10、漆工青年競技会審査員。T 11、京漆器競技会出品、その後三上漆器商に勤務。尚、妻ハルはM 30、第六回関西府県連合共進会に漆工会青年部として出品。

鳥居莊祝（祝次） 塗師

八代中村宗哲及び九代宗哲に師事、その没後十一代宗哲に協力した。髹漆は板物、丸物共に長じていたが、主として茶入を製作。T 13、漆器蒔絵物競技会無監査出品。

中大路秀嗣 蒔絵師

S 13・7・29没 61才 富田幸七に師事。幸七の次女と結婚。M 28、第四回内国勸

業博に富田幸七の弟子として出品。M 30、第六回関西府県連合共進会出品（漆工会青年部会員）。M 32、新古美術品展三等銅牌（宮内省買上）。M 36、第五回内国勸業博入選。T 6、漆工競技会銅賞（三上幸次郎出品）。T 11、京漆器競技会三等賞。T 11、全（煮物椀部）三等賞。T 14、漆工青年競技会審査員。

中西表瑞 塗師

初代岡田表寛に師事。T 12、京都市工芸展二等賞。

平館嘉邦（曾一郎 曾） 蒔絵師

M 30・1・8生 S 56・5・14没。T 5、美術工芸学校漆工科卒。山科三宮神社神官、木村秀雄に師事。S 5・10・S 20・12、美術工芸学校漆工科教員。S 24・10・S 38・3、京都芸術大学塗装科教授。T 11、商工展褒状。T 13、河合卯之助、近藤悠三、伊東信助、塚本繁らと華鬘社を結成。T 15、窯業技師一条喜司に就てエマイユの学理と技術を習得。T 15、華鬘社東京展出品。工芸美術展出品。S 2、商工展入選。S 5、聖徳太子奉讀展出品。日本工芸美術会実行委員。近畿漆工会幹事。S 10、京都漆芸会々員。S 16、工美展出品。S 17、全日本工芸美術展出品。S 19、戦時中の芸術保存資格甲種二級。帝展文展S 2以後入選。特選。審査員。

福家猛夫（フケ） 在多度津 蒔絵師

木村秀雄に師事。螺鈿も得意とした。T 8、農展入選。

本田利吉（李泉） 蒔絵師

M 25・4・10金沢生 S 45・11・20没 蔣池清春に師事。S 36、府伝統産業優秀技術者。本多仁次郎（木地師）の遠縁で魚野自醒と親しかった。

三木玉真（己之助） 蒔絵師

M 14・10・15生 S 19・8・8没 鈴木長真に師事。M 30、第六回関西府県聯合共

進会に漆工会青年部会々員出品。M33、漆器蒔絵物競技会三等賞。M43、漆工青年競技会二等賞。T3、全国美術工芸博銅賞。T3、大正天皇即位の高御座、御帳台の蒔絵担当。T13、六趣園同人。T13、漆器蒔絵物競技会二等賞。T13、美術工芸会展入選。T15、第一回工芸美術展出品。S3、大札記念京都博入選。S5、徳川喜久子(高松宮妃)婚礼調度の蒔絵担当。S10、京都漆芸会々員。S19、戦時下の芸術保存資格乙種六級。京都市展入選。文展入選。美工院同人。工芸美術作家協会々員。

三木表悦(初代)(延) 塗師

M10・8 越前丸岡市生 S24・6・29 没 初代橋口表哲の実弟。兄表哲を頼って京都へ転住。二代木村表斉に師事。初代鈴木表朔と親しく常に行動を共にしていた。M44、新古美術品展三等賞。M45、新古美術品展二等賞。M45、漆工青年競技会一等賞。T2、新古美術品展三等賞。T3、農展三等賞(迎田秋悦と合作)。T4、大典記念京都博銅賞。T4、農展褒状(大津晴霞案 佐々木徳斉と合作)。T5、農展褒状(大津晴霞案 吉田平造蒔絵 古市卯之助金物 表悦塗)。T8、佳都美村(改名) 会員。T9、聖徳太子展(東京) 出品。T11、京都漆工会展出品。T13、京都美術工芸会(佳都美村改称) 会員。T14、パリ万国裝飾博褒状。T15、第一回工芸美術展出品。T15、聖徳太子奉讃展委員。T15、美工院展(会員) 出品。S5、近畿漆工会委員。S5、聖徳太子奉讃展出品。S10、京都漆芸会々員。S12、京都市美術展審査員。S17、京都市展参与。

三木表悦(二代)(貞二) 逞燧) 塗師

M43・10・24 生 塚本正悦の弟。初代表悦の養嗣子。S5、美工院展受賞。S5、S6、S7、京都工芸美術展受賞。S8、京都工芸美術協会展無鑑査出品。S9、流型派工芸展出品。S11、京都漆芸会々員。S12、パリ万国博銀賞。S13、工美展受賞。S13、近畿連合工芸展受賞。帝展、伝統工芸展、京都市展、工美展入選。個展数回。著書 古希記念 三木表悦、久延「三代作品集」。S55、私家版。

山口善蔵(善吉) 板物師

M19・4・22 生 四代大島春齋に師事。S36、府伝統産業優秀技術者。

山田楽全(二代)(豊) 蒔絵師

T4・8・15 敦賀市に生 初代表全の養嗣子となる。S8、美術工芸学校漆工科卒、研究科二年了。S9、S10、S11、商工展入選。S13、市美術展受賞。S14、京都工芸院展受賞。S16、紀元二六〇〇年奉祝展入選。S17、全日本工芸美術展出品 日本漆芸院展出品。S19、戦時中の芸術保存資格乙種五級 29歳の時太平洋戦争に応召、31歳帰還。S29、楽全を襲名。S31、工美展受賞。S32、世界工芸展グランプリ受賞。S50、S51、工業試験場に於ける伝統産業漆芸技術研修の講師。S53、世界クラフト会議に際し開催の「現代の工芸作家展」出品。創人社同人。帝展、日展入選。京展審査員。工美展審査員。各地に於て個展数回。府工芸美術作家協会々員。

山本利兵衛(五代) 光利 幼名房次郎(心月) 蒔絵師

天保10(一八三九)・3・10 生 M41・4・9 没 四代利兵衛の息。安政6年和宮内親王江戸へ下るに当って父より命ぜられ蒔絵諸道具を作る。文久2、將軍家茂の上洛に際し、進献品として秀光作太刀の紫檀の鞘に四季花鳥図の蒔絵螺鈿(狩野永岳下図)、吉則作太刀の鞘の金地菊蒔絵、吉光作短刀の鞘の若菜摘蒔絵(塩川文麟下図)、又老松鷹図蒔絵文台硯箱の下図は中島花陽、大堰川三船御遊料紙硯箱の下図は原照により八品を制作し称賛される。慶応元年(元治元年説あり) 父の業を継ぐ。慶応3年明治天皇即位及び皇后宮入内の用具を調達。明治維新に際し、東京遷都により京都は衰微し、山本家の弟子も富田幸七、川端喜助の二名となる。M3、鮮美精巧意匠斬新の製品の輸出により、本邦特技の妙趣を外国に発揚せんとして、方法を画策し、大いに努力したが賛助する者はなかった(その後数年を経ず蒔絵は貿易品に最適として注目される)。M8、京都博覧会に玉川図絵小箱を出品進歩賞銀牌、その後博覧会、共進会に出品し度々受賞。M9 讃岐金刀比羅宮の蒔絵には門弟富田幸七を伴い鈴木玉船と共に本宮の天井、壁に「桜花図蒔絵」を制作(蒔絵頭取東京山形次郎兵衛)。M11、独人ベンケーイの依頼で蒔絵を制作。M12、西京人物誌記載。M13、漆器商組合名簿記載。M14、第二回内国勸業博褒状。M15、京都漆器工組合を作り頭取となる。M18、五品共進会出品。M23、京都美術博審査委員。M24、京都市工業物産会審査員。M25、京都市美術工芸品展審査員。M25、熊本県博物館の需めにより須磨明石の図手箱を作る(同館所蔵)。M25、宮内省御用品の料紙箱を奨美会の依頼により制作。M26、シカゴ、コロンプス記念万国博受賞。M26、京都新古工芸品展鑑別員。M27、京都美術工芸品展審査部長。M28、京都漆工会設立委員。

M28、第四回内国勸業博妙技二等賞審査員。M28、京都美術協会出品奨励委員。M29、京都漆工会商議員。M29、新古美術品展審査員。M29、京都漆工会第一回競技会蒔絵部審査員。全青年漆工会競技会審査員。M29・11・1、京都市美術工芸学校校友会大会美術品展覧大会漆器部審査員。M30、京都博覧協会創設25年記念展審査員。M30、京都博物館より利兵衛他四名に新製品を依頼される。M30、京都奨美会に御用品の下令あり「春秋草花蒔絵文台硯箱」「遠山草花蒔絵書棚」の制作者として富田幸七と共に指名される。M30、京都奨美会より全国漆器共進会へ出品する「葵祭図書棚」の制作者として山本利兵衛・湯浅久吉・鈴木長治郎・種池安太郎、「逢坂山」の故事蒔絵料紙硯箱」の制作者として山本利兵衛・富田幸七・熊谷正太郎を指名。M30、新古美術品展漆器部審査部長。全二等賞。M30、関西府県連合共進会三等賞。M31、新古美術品展審査員。M31、全国漆器漆生産府県連合共進会審査員。全共進会に「宮中五節図蒔絵文台硯箱」出品、二等賞銀牌。M32、新古美術品展三等賞。M33、新古美術品展新製品審査部長。M33、漆器蒔絵物競技会審査員。M35、新古美術品展審査主任。M36、内国博に京都奨美会よりの出品（原図神坂雪佳）は皇后御買上、二等賞と褒状。M38、全国勸業博へ奨美会出品として立浪蒔絵手箱を制作、感謝状を受ける。以上の他、公共事業にも尽力し、M7、上京十区の中七ヶ町連合の戸長に推され、全九月には上京十区（約三十ヶ町連合）の副区長に推された。M8に同区の区長兼学区取締となる。M14、上京区区会議員となる逝去に際し京都府庁より木盃一組を贈られる。法名惺惺明道心月光利居士、真如堂に葬る。長男はM12・11・5没。15歳。次男甚之助はM32・10・27没。31歳。

吉田光村（平造） 蒔絵師

S5・6・26没。平三郎の弟。T2、農展褒状（大津晴霞案）。T2、漆器同業組合漆器新案品展二等賞。T3、農展入選。T5、農展褒状（大津晴霞案。古市卯之助金物。三木表悦途）。T6・T7・T8・T10、三園合同展出品（京漆園同人）。T8、佳都美村会員。T9、聖徳太子展出品。T11、京漆器競技会二等賞。全煮物碗部一等賞。T12、京都市工芸展一等賞。日本漆工会々員。T15、漆器同業組合員。

吉田金年（二代 平三郎）（古拙斎） 蒔絵師

S20・5・15没。初代金年の息。M29、新古美術展へ棗二点出品。M34、関西美術

会京都彫技法連合秋期展覧会三等賞。M42、新古美術品展三等賞銅牌。T2、新古美術品展三等賞。T4、農展入選。T6、漆器同業組合評議員。T6、漆工競技会銀賞（三上治三郎出品）。T7、京都柳美会出品。T8、漆器同業組合代議員。T8、日本漆工会々員。T10、漆工青年競技会審査員。T12、日本漆工会地方委員。T13、漆器蒔絵競技会無鑑査出品。T13、漆器展（実用漆器部）褒状。T15、漆器商名簿記載、分家であるが伊勢屋派の中心になっていた。

美濃屋文書

『美濃屋歴代事蹟』 三代孫兵衛

「当家先祖者、越前敦賀郡敦賀泉村百姓、榎垣孫太夫次男なり、幼少より、当地寺町六角下ル、美濃屋宗助様方へ、奉公仕勤中、格別の出情に被為思召、未宿這入に者、不相成候へ共、思召を以（宝曆十一年、辛巳三月）元手、銀壺メ五百目（御書付、頂戴仕候）、此御書付、代々大せつに今に持守り居候、夫より、御礼奉公五ヶ年相勤、明和二年酉八月、宿這入（行年三十七才）、錦小路御幸町西へ入、裏屋へ、初而勤由、此節迄も、又兵衛と称す、右御書付、表通り頂戴仕候、然る所、眼病に御取付、三ヶ年半も、稼も出来不申、難渋御せまり候故、懇合方々、氣之毒被存、頼母子講取結可被申様、供々世話（可被致様、被申候得共）、自分は、結講には候得共、子孫に至、其儀有之而者、末々出世の妨と、堅き御心寄、辞之必死之所を、永々と喰志ばり、漸と安永元辰正月、（寺町錦小路上ル、表屋出其時より）塗物道具商売始、勿論本家様へ、御届之上、孫兵衛と改名致所、丸之内木瓜を、角切角之内に、木瓜改名字、稻垣与祖より改、其月に妻る里娶、（江州滋賀郡今堅田村）而、祖孫兵衛往生（安永九年八月十三日行年五十二才）玄西様

其節、跡相統難儀に付、親類之内、孫八殿、三郎太夫殿、伊左衛門殿、河作兵衛殿、金五両つゝ、都合廿両を以、元手金として、相統候事、然れ共、年来、正路強勢故、□本家勤中にも、專につ名を取、呼名高き勤切、御方御恵により、斬相統来り候事は、全、祖正直、真実意、御蔭余慶と、末々迄も、是を承知、別而、不馴商売に御取付、当時、自由□合と、親諸事付而も、商売難有存、大せつによるこひ、出情可仕候事、前に、印有之妻る里御連合、御往生後には、子供は、多く跡相統は、中々以六つか敷中を、一途に、家大せつ心強、艱難、辛勞、正直に稼、御働事は、女義には、稀成人愛能御方故、商売向、親類方も、皆、此御方を目当番込、永々能間、取統相成候事は、女ながら当家に取、大節に、暫時茂、御恩沢わすれ難事と可存候、御自分は、質素慎深く、世人へは、至而遣り好に而、御一生思召通り指支奈く、恵み遣候、御徳□親族不及候事、御生涯、此世の事迄も、御よろこひ、誥則、五十七才に而剃髮、御実母御名之通り、妙智御改、御身は、御安寐に而、

天保五年八月廿四日御往生満九十二才、二代目同村字野三郎太夫親類に付四男なり、在所にては、与四郎幼少にて、上京亀次郎改る、父死去に付、孫兵衛、名前相統、年廿一才、□年身分、商売向は、いまだ不覚、元手銀は、前に印通り、うすく、小児は多く、当分所も、迎も難立行候へ共、前に、認候通り、母る里、一心をこらし、売買、先々へ頼込、親類方も、取訊亀平様、覚祐様、格別之預、御取立、皆々氣之毒神妙に被思召厚、御一同御引立被成下候御蔭故、年々商向、勘定能代品物も、相応出来、相統相成候所、天明八申正月大火類焼厚運御蔭借入有之代品物道具相、残候安儀仕候事其後矢張同家所飯住仕居候、追々商向、都合能相成に付寛政元年酉五月、寺町四条上ル、今地に、地借仕、家立、引移り候、寛政三年亥七月改、買得仕候事、文化四年卯

二月、寺町六角下ル式部丁、抱屋敷いせこ町買得、文化九年申四月、隠居いたし孫助と改名五十三才、文化十四年六月十三日御往生安祐様、行年五十八才、妻まさ、祖の惣預子なり、六十七才にて剃髮、天保十二年丑五月六日往生、妙流様、行年七十才

右御方々者、難有御苦勞に寄、段々身分結構に過候事を、跡相統者は、広大の御高恩暫時も、忘れざるよふに、折々はを拜聴いたし、元来より中統次第、承知可仕候、必本を加るく思ひ候ては、すゑ納り加多具、日々難有より古ひ深く相守り可申候事、三代目、祖ノ末子なり幼名清吉文化九年、名前請統孫兵衛改三十四才、又孫兵衛死去後并勤、四代目、支祐ノ子幼名秀次郎、天保十一子四月名前請統孫兵衛改、同十五辰三月廿日死去四十九才申四月、又孫兵衛死去後并勤、四代目、支祐ノ子幼名秀次郎、天保十一子四月名前請統孫兵衛改、同十五辰三月廿日死去四十九才

『家訓』 四代孫兵衛

「子孫迄も相傳候義者、我、死後二至、
申付置候次第、為心得有増書

一 御法ノ義、故により、仕来り返り、叮嚀に無怠相勤、御法座も不相変、折々可仕、勿論、自分聴聞大せつに、弥信し上候、慈悲、日夜無油断、よろこび可申候義、第一に候事
一 まづ、家をおさめ候、第一は、自分達者に無之しては、日夜勤り不申、我も同様病持には候へ共、勤方□被存候、兎角加んつよく勝手われ立服いたし候段、見苦しく生得小智未熟ものゝ上、病におわれ候故、中々大老迄も賢固に守り、子供ども成長を見立、相譲迄の所、命覚束なく存斗り候、其方一人は、行末大せつ成身分にて、永々不行跡訟を少しは、御謝のため、我に替り、其支配可

致役目候間、大老に可相成候迄、自分躰大せつに相守り可申候事、都而、金つばめ合候事なりがたく、小口斗りに而、志りの都合の義、不調法に候、金借入の事を、左而已に不思、濟方大事を、延々に心うすく仕来り候段、以来、急度相慎み可申候事、商人は、節季つばめ肝要の所、仮初にも借用可致万簡起り、内勘定は、何共かまわず、払いの見得斗り、おもに相成候、平日、分限を不弁、世間能見得を徒くろひ、気を張候程、祇服のなきいたし方被存候、此方共、小家は、節季は取払、手都合兼て、前以より心可け、可仕筈候間、此義、不手廻しに不相成候様に、近来は、ほんの老人の□連万簡を以、内手当金を借入、節季通候事は、只其場の気安をそんし仕へ共、油断第一に相成候事、身上持肝要に候、

相続仕方には、聊か内の有合、心当に仕候へば、自然と底迄かまひ不申了簡に相成尤め、延し金杯は、性分に無之候、都て多少共、出金は小智に、仕入金は大節に可致本意に候所行違ひ、出金は何の労なく大氣にて、入金は軽々敷心得仕来り候、是迄の性分の事、夫故、我は幼少之時より、身分に付、聊も入用をたしなみ過行候しは、其方は大違い、身分大金入用も心配なく、不□来り候へ共、此節に成相慎居候段、此未精々、前々年、為冥加尚更心得在りたき事に候

仮初にもおどろき、或は□しつかれ、相手に寄り、其場に服立いたし、至ってかみつよく、甚小領次第、小職人同様、仕方服立いたし一生の慎事、見苦候病氣たりとも加ん起し候事は、たしなみ度候、何程事にても、召し使ひたり共、服立て間敷事は、心得度候

世間に、利口らしく相見得候よりは、身分節季、世帯方、つまやかに取りしまり第一に候事、前々より、先方向の事に道理み付け、承知いたし義、其方の性分、是なども我とは違候事、見観可申候事、其外、わりよき買物杯、申込候へば、尤に存、買可申心得有之候、持商売之外、買物等は、子孫のために候間、決して、買申間敷、兎角、出金は、小智にて、何に不寄商人は、長帳面津々しまやかに、年過し、日々心可け可申心苦の所、勝手儘に捨て置きじだらくに過し候事は、こんきのうすき勤方に存候、兎角、年おくれ、勝ちにて、留守をつかひ、うそを申立つる義は、小智の至り、無余義筋も候はゞ、面談いたし、其訳断り可申立候、病氣に候はゞ、其次第得度可申返候、常々帳面、不手廻しにて、出入長計りいたし候、総て此方とは、相違う事に候、節毎に、手おくれはいつもの仕方、商人の不心得義に候事、世間の教の内、夜分は、用向仕舞次第、早く寝入り、朝は、早く起候様に承り居候茶や向は、他人とは、格別に違ひ、不相応、莫大の大金を捨、我はに、必死之難義を、度々懸け誠に、先非を慎み、当時所おいては、身の毛もよだち、おそろしく可有様に、此方は、存居候へ共、自分必死の事を、軽々敷思ひ、是迄の成行を思ひだす心得、浅く相見得歎ヶ敷存候、少分たりとも、前々よりの恩を志り候へ者、何事に不寄、我□敷事をもりくつを付、一人さん用は、なきはづに候勿論、茶や向は、申迄も奈く、身分に付き聊か入用筋は、冥加を存候へば、可相守心苦しく候事、是又、恩を志り候義、長久第一の事

未々所にて、子たるもの、気わるく、いたし候事は、皆親より教

候□□有之候間、深く心得可申候事

其方は、取引心かたきと申すにはあらず、只、見得より起り候渡し金之故、少々能有金之□迄ハ、打払、其上は、借受候事を軽々敷思ひ、ついに、大借迄にも、見得絡ひし候性分の事、我とは、小智と大智の入替り、相違の事被存候、此上は、当家は、少しも金なはし、此次の、返りに、内勘定も同様に相続いたし、孫共へ相譲り候へば、無此上も、其方身分入情、手柄、希う所に御座候、一懇合親類たりとも、無拠筋、合寄り、取替金仕候事も有之候共、五両限り、上は無用可致、其上の義は、何程慥か成る、家に候共、引当奈く候義は、家風無之旨、断申立、決而、不相成候事、一普請法事、都べて、別物入の義、前より相知れ候事に候はゞ、其手当、前より心かけ、別手当いたし、何事も被懸□可申候事、

一徒ぶやき候事は、いつにても、尤の義にては有候へ共、甚聞苦敷、増て、主人ばやき候事は、家内中、志んぼういたし居候間、深く心得、慎可申候事、右、等は、前々より、其方仕来り、不勘定計りに、暮し候得共、我、下知候ゆへ、あらわれ不申候へ共、都て、我とは、裏表の相違有之事は、目前通りに候、当時は、我に對し、勤居候へ共、兎角手代了簡二而、家に取りみづくさき仕第我、死去致候へば、何程申付置候共、外に奈ら婦る人はなく、是迄の算用志らず、存命中は、隠れ居候故、皆利口らし具、相見得候間、我仕くせ返りに可致義、余かく残、念に存、且は、御先祖より、代々承御厚恩、御蔭、今日迄、暮し過し候を、思ひ出し、此一書、御先祖方へ、申わけのため、死後への書き残し置候、加へすく、死後候時は、たれ一人、申付候人はなく、中老年柄、勝手儘に可

相成哉、子孫ため之故、折々、此書取出し、自分心得様、姿様、引親相嗜事に候、自分不相守義共有之候て、子孫召遣ひに至る迄、何程申付候ても、何共不思議、其方より元は、おこり候事と可存候、此書は、其方性分に当て、申付置候事候間、跡相続者共へは、其性分に応じ、時々、心に可け、嚴敷可申付候、

一此末々其方、第一の肝要役目の儀は、我、是迄仕向、同様に、孫共を養育いたさせ、両家名、無事に相譲り、連残可仕度、是而已を行、希う計り存居候也、尤如此、一々相守り、相続居候とも、其方、寿命なくにては、跡々若年者計り候故、むな敷く可相成候哉、是又、我同様に、老人迄存命願所、然れば身分養生第一にして、御法に心をたすけられ、我加らたにあらず、家相続跡譲り渡し、大せつ成からだに得度、承知仕、七十有余迄、有度事に候 十兵衛へ 孫七（花押）」

『幼稚教訓鈔』 三代孫兵衛

「年々歳霜経て、亦春迎ひ、愚孫共、次第に成長いたし、予に、日増に及老衰、行末之程思ひ候ま、形見に残し被置度、往古より、明智師、皆自患者と卑下被成、我等は、結句、愚ものを御慧しならではしらする大愚ものに候、今生は、生涯教守り、慈恩おもんじ、内心には、御宗意通り、深、信心決得いたし、報土往生安堵之上、報謝称名、日々無怠慢、今未共、身果報をよろ古ひ、素懐可遂旨、連々相傳申度而已、まいらぬ筆を不顧、」

幼稚教訓抄

夫人間者、万物の長たりと示し給へり、適人躰得、成長之上、教の道おさく、乍聞軽々敷思ひ、自分勝手に寄せ、我意を募り過行候へば、寔に鳥獸にも劣辺しと、往古より、深制置多り、爰以、人界に生得候、所詮には、生涯教守り、誤りを改候事、肝要に候、況男子者、家相続身分、子孫迄も其風義習ひ候へ者、永續安全、皆此道に止候事、

先幼少之時より、手学入精、此道は不論尊卑相励取遣、通路ば叮嚀に認、中途より算盤無懈怠、達者に修行可致、追々家職筋不及申、出精相勤可申候事、抑教道、先四恩と定被置候、

一、親様御養育広大御高恩、骨随より大切御意儘随ひ、少しも我意を発せず、命に順従うを以て和漢とも孝子とす、故に、天下の宝にて、天道諸仏神威能し給へり、仮令御往生後たり共、時々振、是迄始終思ひ出し如し在給仕る也、絶間なく、御敬冥加之程、御礼可申事に候

一、御国恩御蔭に而、今日を安穩に暮候、広大之御恩沢、若暫時も御制度御有免をこれある之者、身立所もなく候事、昼夜不断難有可存事

一、商売御蔭に而、衣食住、結構に過行、寒暑飢渴之無、愁、容易凌候事、全家職御恩沢寄所也、既武門は戰場臨、打死又は次第寄忠死、有レ之候事も、皆恩沢を知る人ぞや、家職は則御主人也、主命寄、何れ程の心苦勞もつとむべき勤答、愚成者、是迄の自職を疎族有レ之小身主持ち、大身を羨敷思ひ似たり大不忠なり、今日迄、安寐に露命繫候、高恩忘連故に候、兎角世俗にも、飯粒重畳へ登り候杯と申ごとく相成候事は、今日、食事恩を、何とも思わざる故に候、勿躰

なき次第に候、衣食住、高恩不断よろこび、詰暮候へば、堪忍も、辛抱も、腹立も、心易治り候事、難し有ものに候事、

一、仏法御慈悲以て、未来往生安堵いたし候て、御恩報謝、御称名、行住座臥、無レ怠唱させ給へる身上に成候得ば、現当御利益を以つて、諸仏神に御冥見二恥、御掟通り相守り、我身誤りを懺悔いたし、日増に嗜心得に相成候、右等、四恩おもく相守り候へば、自然と数徳備り候事、全御加護故候事何事に不寄、我前世の因縁としらさせ候故出来さる愚痴心起り不申様、相成候、同不足ケ間敷念うせ候よふ相成候、同他向見浦山敷思ひなく相成候、三度、飯やすらかに食事い多し、御大恩分而、うまくたへ、日々の冥かをしらせ被下候へば、不筋心、少しも発り不申様、相成候、上輩二あらず至而下賤にあらざ、卑下もなく、中分に生させ被下候事、歡ひ心相成候、辺鄙浦々在所扨とは、大違ひ無レ此上も

王城之内にも、場末にあらざ、一切自由過たる場所住、果報迄しらせ被下候、我身のいたらざる事を志らせ被下候ば、仏力なくては、誤り立不申、小ざかし、我身勝手を利口成と、驕慢よりおこり、又は仮初にも、腹たち候杯は實に仏神の御きらひと、心はずか敷存、自然与薄くさせ以下候、王法仏法者、車の両輪ごとく、片輪にては調度仕がたく義、御経御説きたまへり、由別而、宗祖様始、御代々様、御慇に王法国法仁義道相守り、内心に者、深く信心決得いたし、日夜、無怠慢、報謝称名よろこび、生涯うつく敷わたる様、被仰付候、王法は、我身分取り、渡世無恙相續なり、身おさめ、家調ひ候、はねば、参詣も、報謝も、失ひ候様可相成と、弥渡世大切の心得被成下候事、よろこひ候、世人、兎角に時之振合に不応、世間の見得を張、我身も不愼、借財多く相成候時、破滅基可恐、有徳に

は、不及候へ共、借財の鬼程、こわき物なく候、我身計り可、眷属親類迄も流浪いたさせ候事、皆借財の鬼に責らる、故、今目前に数を不レ知、恐敷は借財奈り、及零落、後悔無レ論事に候、元来、貧窮は、返に孝子、或は正路もの可レ有レ之、中分以下飯令少々遊金有之候、油断い多し候へば、借財の始りに相成、前書之通り成行に可相成、油断大敵と申聞せ通り、恐敷ものに候、子曰、河辺に出、流水見て、誰人も如レ此、片時も勿レ油断する事、流水再びかへらず、月日立も、亦如レ此と示し被置候由、片時も油断は安からず思ひ、四恩をおもんじ、冥加之程、慎可申候事、

右之趣、愚昧、我等認候事、おこか間敷候へ共、孫達へ形見に残し、教聞せ度儘、拙なき筆を不顧候、哀此書を相守り仰、永続可仕義を希而巳

清太之助持用 嘉永六癸丑年 謹而写

『明治五年上棟出入請算書』 六代孫兵衛

出方

從申年十月十一月三十日至

一金貳百拾五兩 本城

清右衛門

相渡候

一金四拾四兩壹分 丹留五郎

貳十壹文三百文 相渡候

一金三兩三分 屋根屋

壹朱卜 七兵衛

六貫文 相渡候

一金九兩壹分 石屋

八貫文 文次郎

相渡候

□金四兩貳分 灰屋

宗兵衛

相渡候

(表紙)

明治第五申年十月十三日取掛り

同 十月十九日上棟六代目道義

明治第六酉年五月三十日惣出来

臺所座敷次キ間図面□算書

會計出金口々惣計至

出金貳拾九兩二 兩替

入金百九拾貫文 出入

一金壹兩 上棟二付

貳〇三朱ト 大工祝義

三百文

但し貳分 清右衛門
貳分 次三郎衛門貳人
貳分貳朱 若者五人
壹朱 半人 老人
三百文 小供 老人

一金壹兩壹分ト 右同所

八貫文 手傳祝義

但し貳分 留五郎
三分 六人貳朱宛
八十文 八人壹分文宛

一金貳朱天満宮
上納御札

一金三兩貳分上棟節
伊予亦私

一四貫文 右之節入費

一六貫八百文 左〇壹有

一金壹兩 福永武兵衛

三分 従前之屋敷

地面料相渡候

二ヶ月分

一金壹分貳朱 大便津保

壹勺

一金貳朱 瓦之掛り

五ヶ文 〇蔵江

祝義

外二小供共

一金壹兩壹分ト 柳屋彦兵衛

貳十ヶ文 赤銅板

一式ノ四百文 袋九私

合羽損料

一金八兩壹分 丹波屋幸兵衛

座敷天井用

一金六兩ト

貳十五ノ三百文 日野屋又兵衛

私

一拾三ノ文 河内屋長兵衛

私

一金三兩

拾四ノ五百文 ?屋勘兵衛

私

一壹ノ九百五拾文 竹屋吉兵衛

私

一金壹〇貳朱 臺所

八方 壹〇

一金貳分貳朱 庭石壹ツ

一金拾兩ト

拾四ノ六百三十文

相渡候

石田清兵衛

一金貳拾五兩也 青山市左衛門

相渡候

一金壹兩壹分ト 表具師

壹ノ貳百五拾文 店次ギ間用

一金七兩貳分 戸屋吉兵衛

私

一式十壹ノ文 繩むしろ

古茂色々ノ高

一七貫文 作事用

赤味噌

一三拾五貫文 源竹

じやりノ高

一拾壹ノ三百文 左屋根板

ノ高

一金貳朱ト 鉄金物

壹ノ文 硯金高

一金貳兩貳朱ト

拾壹ノ百五拾文 作事方

上棟之外

酒肴遣候

ノ高

一三拾五貫文 作事方

酒手ノ高

壹人付五拾文宛

一金貳分之町内進物

肴 四軒

一金壹兩三分ト 丹留五郎

貳十六ノ九百文 迄払

一金壹兩壹分ト 店方より借入

五百文 当座別有之

明治六年從一月、四月三十日至

出金拾五兩之 兩替

入百五拾貫文 出入

一金拾八兩貳分ト 本城滑右衛門

残三ノ八百 昨年より惣勘定

差引高渡候

一金四兩貳分 青山市左衛門

貳朱 昨年より惣勘定

差引高渡候

一金三兩ト 石田清兵衛

拾八ノ五百文

一金八兩ト 植木屋平三郎

拾六ノ七百五拾文

一金貳兩貳分ト 手傳方

拾七ノ八百文 留五郎

一王ノ六百文 伊予文払

一金壹兩ト 丹後屋幸兵衛

拾三ノ五百文

一三貫八百文 屋根屋払

一拾七ノ九百五拾文 竹屋吉兵衛

一三拾七ノ貳百五拾文 日野屋善兵衛

一金貳兩三分ト

貳ノ八百文

□屋勘兵衛

一金壹兩 鏝半乍払

壹百貳朱 引手代

一四ノ五百文 大屋源三郎

一九百五拾文 日野屋清兵衛

一壹ノ五百文 金屋太兵衛

一 壹ノ七百五拾文 井□払
つるべ

一 式ノ八百九拾文 河内屋長兵衛

一 金三分 祐森長右衛門

一 金貳兩壹分 石井簡代

貳朱

一 金貳并壹朱 庭門代

一 七ノ六百五拾分 井戸車

左□代共

一 金九兩 松平吉蔵

□并貳朱 建具経師

一 金壹兩之天神□払

庭石色々代

一 金壹分 昨年以来

建家札

松原渡候

一 金壹兩之 歎喜光寺殿

岩石買入口

相納事

一 拾四貫

申年十月廿五日

貳百三拾分

より

酉年五月

中相掛り

惣差引

附落シ金不足

吟味之上出候

錢入高四百四拾貫文

同出高四百四拾貫文

此表□□

右惣出高

金四百五拾五兩壹□三朱乙

左ニ入金記

入金之扣

一 金百五拾兩ニ楨□構物十種番

壹役

三宅勘右衛門殿

売代金出入帳より

別物仕金此度

出金仕事

一 金五拾兩ニ伊勢町一軒役

今井宗吉殿江

売渡候代金

□地代金也

此度出金仕事

一 金八拾五兩ニ当店宅地所

代売方

東西 七間

北南 貳尺壹寸

明治□申八月

町中江売渡候

地□金出金候

一 金百兩ニ永□社中江

預ケ金取戻候

但し

店□より宿料金

市指宿料金也
酉年二月相改事

六ヶ月出金候

一金四百五拾五兩

壹百〇三朱

一金拾兩 右銅焼銅
三并三朱 売代金

一金貳兩貳分^同 五月三十一日出入帳

右出高金記依而都合

より徒段出金
相成候金差出候

差引無之事

一金拾兩 右帳面
貳并貳朱 売代金

一金拾兩之^戊 平日番筆角

右金一條後年心得
相成様と存書記申置候

座子挺 壹〇
□構物□□

如斯

一金三兩之 右壹分銀
売打賃金

安田□引売明治七四月

明治七戌年

売拾四兩壹分此内四兩壹分
裏家作事用ニ遣の事

五月道義

一金五兩之 亡父

跡相続人江

御殿御講預ケ

金明治五三月
御戻シ相成付

出金候

『奥井性源助義宿這入被致□□記』

一金拾五兩之^西 店宿料トレ而
月三兩二分

「安政三年辰年三月、雇入候久吉義、

從一月〇月中
五ヶ月出金候

一金拾三兩^同 市指宿料金

貳分 從一月六月中

若州小浜今存家町、大坂屋作左衛門倅に御座候所、同月飛脚、吉兵衛殿、世話を候、当家江奉公參、年十一才に有之、奉公働方至極に付、年十九才、春、元服申付、源助と改名致候節、当地に而、親本一家と無之不都合付、当地、青野伊助殿、宿元と相定、丸十一年、奉公相働方□定相成、其後、益奉公相働方、実躰者に付、元服後、再度、国元へ相遣候、旅費錢別相遣し有之候、然る所、十一年之中、明治第七年十二月中に而、年中首尾能相働来る、其節、□入、

祝儀有之所、都合に而、延引に相成、明治八年中、礼奉公一ヶ年、是又、無滞相勤来る、依而、明治第九年一月二日、入祝義として、右青野伊助様、参物

規相記、酒式升、鯛かふら肴鉢、鯽焼物、家内中一疋宛

右祝酒、午後、家中盃致候、目出相済候、依而、樽入挨拶金、五拾錢返札に相遣し申候、明治九年一月十日、青野伊助殿呼よせ、本人源助、宿這入式遣し物、左に記

目録奉書式ツ誓書壹枚

目録	一 緩簾	壹張
	元手料	一金三拾円也
	道具料	一金拾円也
	以上	孫兵衛
	明治九年一月十日	源助江

金包致候、金円計り
白赤水引

金三拾円
金拾円

右同断

目録	一 脇差	壹腰
	一 麻上下	壹具
	以上	孫兵衛
	明治九年一月十日	源助江

脇差在來之間壹腰遣候
麻上下在成來常紋附器具在合品捌候
へ共、紋付之品は、実躰相勤方心得宜敷者に付、格別生得を候、紋付在成之品遣候

右、緩簾之義は、木綿三巾、長の、れん、印付、色、当家之通り、印書様、当家之通りにして、壹張、白赤水引掛ケ遣候
以上、広蓋式枚遣候、

一 今十日、御仏壇御満、本人源助江相渡候事、母様始、家内中立合、祝儀式、目出度相祝申、依而、申渡し、左之通り

一本家同商売、源助壹人限り、差赦事、尤本家売先き、少し茂差支無様、可致事、但し、買先、同様と相心得、売買共、急度相守り申事

一本家印、遣し候得共、紋所は、不遣事

一 国元江、引取商法、相開申度義、先年より、再度之相頼付、今日、速に帰国いたし、国において、商法仕様に申渡し候、依而国に而、商法事故、前式点之外、其元之勝手にいたし可申、猶、国に而、相応之商人に相成様、致度被存、精々、添心申付候、然は、今日に而、用済、明十一日より、其元用向に取掛り、都合出来次第に帰国仕様に申付候

一 右、祝盃、肴膳部赤飯汁なます焼物取肴三種

家内不残、青野伊助殿、源助、鉄藏人数拾五人、前於座敷、盃、取替候、目出度祝盃、相納申、万々歳々目出度、此上義無之大変祝申事

○ 付は礼奉公一ヶ年半季、再々仕著料に不及申所、源助身上故、料遣し有之事
○ 外に、金貳円五十錢預り金有之、則此節、相戻し申事

年扣置

昨八年十二月二而、源助三十才、当九年、一月にて三十二才、但し、十一才に、前記事通り、余る此年之計算者、年十二月切に見る、但し、本歳見る時は、当九年に而、三十才何ヶ月と申年に有之候、年越は、二月事□失張二月過は、三十才に御座候、依而、式十年奉公仕候事

右之□計り方、当家二近年無之時、町内三四軒、猶其余才聞合之上、孫兵衛、亀七兩人、相談之上取極而、尤本人之心得方、年中勤方有之事柄に付、此般、右源助勤方、相応之上、出精と被存候、以来之心得に相成申候時、其次第、柄書置、目出度如斯

明治九年第一月十日 当家六代 孫兵衛

『第四回勸業博覧会に対する申上書』 八代和三郎

「拜啓仕候、陳者、来る廿八年、第四回勸業博覧会に附て、乍恐勸、私の精神、左に奉申上候に附、何卒御才読の程、御願奉申上候、

謹而奉申候、陳者、来る四回博覧会に附て、御主人者、如何御思

召に被為有候かは、存し不申候得共、甚々乍恐、私の積りには、

十分出来る丈盛大に致し度積り有之候に就ては、出品者勿論、売

店をも出し度積り有之、然る処、廿八年と申せは、余程永き様に

有之候得共、最早、正味才ケ年程より無之、依而、今爰にをいて、

其出品物なり、売店物の仕入方に着手不仕候ては、其当極に至り、

製造方に於て、狼狽致するは、眼に見え有之、如何なれば、既て

に、各職方にをいて、出品物の着手致し居る方、沢山有之に就て

は、其当極に至り、急き立て製造致さしむる、当底難得やと存候、

依而、御主人物、斯くの如き義、申上得ずとも、御承知には御座

候得共、何卒早々御着手に被為成候様、奉願上候、且又、当度出品物者、可成、新製品を以て出品致し度、且つ、其新製品出品物者、可来京都得意の意匠を以て製し、出品致す方、宜敷かと存候、次に、売店物、是者、土産物を主とし、精々安価物を以て発売致度目的に御座候、然る処、乍恐当度、私の才大目的となすは、尠の山氣を以て、十分盛大に、活発に運動をなし、成程、京都稲垣者稲垣なりと云う処を、各世人に広告ならしむるを、第才大の目的に御座候、それに引続き、商業拡張に致らしめんの精神に御座候、実に近來の有様にては、将来如何と案し候に附、斯の如き時来るを幸となし、何卒御主人才奮発を以て、活発に運動をなし、我々をして御引立の程、奉願上候、此の義に付、先達来より、才応御相談願上度存居候処、才向宜き折なく、何卒其内には、何卒才度、御相談願上度、宜敷奉願上候、先者右の義

宜敷御願奉申上候 恐惶謹言

明治廿六年五月

青野和三郎 再拝

御主人様

『釈妙阿五周年祥月命日法要（大正八年七月十三日）報告略辞』

「釈妙阿五周年祥月命日法要 和三郎拜

本拾三日、釈妙阿五周年祥月命日法要に臨み、宿坊金宝寺、四条

了達殿之読経を乞ひ、左記、親族知友之参詣求め、左に又記す

る供養をなす、本日は、朝来天気清朗満天、一点之雲を覆わず、

真に心地清々たり、回顧五年之今日は、妙阿、遠行臨終之前一日

にして、近親之人々相集比、無量之念に満てたりしが、翌才年を

過ぎ、又二年を過ぎ、三年、四年を終りて、本日は、早五超年を

迎へたり、仕合はせなるかな、母は、七十四迷にして、至極健康、日夜家事之指導に立たれ、壯者も及ばざるの御行動は、一家の為、無限の仕合はせたり、長女たみ、又壯健、一家内治之万般に従事、妹弟之教育、保育に熱中、実に、姉たみ之為、妹弟の幸福限りなし、是れ、たみ本人之心懸、宜敷に抛るは申す迄もなき事なれど、妙阿が、臨終の砌御言ひ、聞かされ、云ひ残されたるの力なり、妹み栄は、今尚通学中にして、明春四月を以て終業するにあり、本人も近來肉太り元氣にして、勉強に勉め居る、傍仕舞小鼓之稽古をして、一つは体育、一つは楽しみとせり、孫一郎は、商業学校に入り、今は、予科二年生なり、当人も、当節肉肥へ元氣にして、勉学に専心たり、当春、予科老年の受験成績は、幸にして、及第者式百五拾有余人に対し、拾九番を以て及第せり、次き、富み子は、今、尋常四年生にして、日々通学せり、子も病みたる事なく、肉太からざるも、倍丈に長し、成長之上は、兄弟之内にて、丈長きに至る可と被存至極の元氣にして、勉学成績、又普通以上なり、傍ら、み栄と共に、仕舞の稽古を楽しみとせり、時折、宅に於て仕舞小鼓之遊びなど相開き、又觀世流能樂の觀樂をもなすなど、最善之楽しみとせり、商業は、仕合せにも売るに付け、作るに付け、厚き愛顧を受け居るなれば、只々仕合せと喜び暮しつゝあり、現在、店員清七は、無事通勤、美藏、兵隊驗査昨年にして、第二乙種なれば、入隊するの用なく、近頃は、一層の活動、大いに働き振りを見せつゝあり、次に四郎は、本年兵隊驗査を受け是れも第二乙種なれば、入隊に及ばずと被存、日夜、美藏と心を一つにして、正直勉勵にあり、美藏は、外に動き、四郎は、内部に動きつゝ、前途有望の今日なり、次に与七、身は小なりと雖も、健康にして、先輩者之命

するに従ひ、温和にして、何事も意味心地よく働きつゝあり、入店以來、未だ一度の帰郷をなさざれば、当夏には、一度帰郷為致申考にて、此の程も、紹の羽織を新調になすなど、心懸準備せり、次に、竹次郎、悟一の両丁稚あり、式人とも、無事活動にあり、略記する処、一家如此にして、無異仕合せの状況なれば、是を靈に報じ、一家の幸福を祝す、靈、是れに安じ給ひたまうべし、生は、靈の加護にや、元氣變らずして、倍努力に勉むなり、必ずや家名の発揚を誓ひ申さん、只、順席として成すべき事之遅れたるは、姉たみ子の身の収まりの付き居らざる一時なり、是も今や、親族方の熱烈なる御尽力を受け、運びつゝあれば、近く、祝して報告の時や来らん、本日、是れを成するに至らざるは、誠に遺憾にあるも、今暫くの猶予を求むるなり

次に、報じ度は、植村御一家、御変りなく揃われて、御壯健なり、姉は時折、服薬の御事もありと雖も柳に、雪折れしとや、御達者と申すなり、日に一度は、必ず御來訪ありて、老人小供どもを、なぐさめあり、又、家事向一般に付き、配慮受けつゝあり、その御恩は、必ず忘れ申すべき、子供又必ず報ずべし、兄孫兵衛氏、此在台夫婦健康、週刊新聞紙発行被成つゝあり、其の地の人に聞くに、此の節は、お金も少々貯へられたるとの事、實に是れ、仕合せの事を聞き、母共と語り喜び居れり、過日も、本日の祥月命日たるを報し置きしに、柚の砂糖漬けを、多量に贈られ、昨日着荷、直に靈に供へ、他は本日供養の取菓子として、参詣の方々に披露をなすなり、其の他、親族青山老人、始め皆々御無異なり本日は、日曜日に當りて、子供等朝來、法要を楽しみ、元氣愉快になし居れり、姉様諸事御手伝に、たみ、老人共々、來客準備に多忙たり、實に日出度事に

て候らわんや、生は、心を清めて筆を取り、氏の報告文を筆するのうれしさや

つゝしみてもうす

あなかしこ」

明治十九年の美濃屋

『府県漆器沿革漆工伝統記』 納富介次郎

第二 京都府

農務局・工務局 明治十九年六月二十五日

下京区第十二組大文字町商、稲垣孫兵衛の祖は越前国敦賀の人なり。宝永二年京都に移住し漆器店を設く。美濃屋と云ふ。世々茶器に属する物品を販売す。其三代某長崎に到り、某商の委託を得て和蘭に輸出する器物を製す。四代に至り大に販路を拡張して関東諸州に及ぼせり。之を中興の祖とす。今代孫兵衛は則其玄孫なり。亦能く商業に勉め、安政四年江戸に出て専を輸出品を製し、明治三年率先して神戸に売店を設けしも他の濫製競売の弊に堪へず、同十二年に至て閉店し現今単に内国用の器を販売すと云ふ。
明治十五年 千五百円 全十六年 二千円 全十七年 千五百円

『八代和二郎受牌記録』

明治三十年

銅賞

京都岡崎博覧会館

創立二十五周年記念

明治三十三年	銅賞	博覧会
明治三十三年	銅賞	京都美術協会
明治三十四年	銅賞	全国貿易品博覧会 於京都
明治三十五年	銀賞	京都全国製産品博覧会(第一回)
明治三十七年	銀賞	同(第二回)
明治三十七年	銅賞	同(第三回)
明治三十七年	銅賞	米国セントルイス・ユニバーサル博覧会
明治三十七年	銅賞	同
明治三十八年	銀賞	京都全国製産品博覧会(第四回)
明治三十九年	銀賞	京都美術協会
明治三十九年	銀賞	京都凱旋記念内国製産品博覧会
明治三十九年	有功銅賞	凱旋記念五二共進会
明治四十年	銀賞	京都美術協会
明治四十年	銀賞	東京勸業博覧会
明治四十一年	銀賞	京都美術協会
明治四十一年	銀賞	京都全国製産品博覧会(第五回)
明治四十二年	銀賞	京都美術協会
明治四十二年	銀賞	京都全国製産品博覧会(第六回)
明治四十三年	銀賞	農商務省府県聯合共進会
明治四十三年	銀賞	京都美術協会
明治四十三年	銅賞	京都全国製産品博覧会(第七回)
明治四十四年	銀賞	農商務省府県聯合共進会
明治四十四年	金賞	京都全国製産品博覧会(創立四十周年記念)

- 明治四十四年 銀賞 京都美術協会
- 明治四十四年 銅賞 同（作者三木表悦名義出品）
- 明治四十五年 金賞 京都全国製産品博覧会（第八回）
- 明治四十五年 金賞 京都美術協会
- 大正二年 同
- 大正二年 銀賞 舞鶴築港記念全国物産博覧会
- 大正三年 銀賞 東京大正博覧会
- 大正三年 銅賞 同

附記
大正初年以後、京都漆芸品評会の審査員（大正九年物故）」

昭和八年の美濃屋

『続京郊民家』 昭和八年、毎日新聞社刊

「店の大框 中京区寺町三条南 稲垣孫一郎氏店

約七寸に四寸といふ大框を廻らした店の間——八帖の間の見付右一間がショーウィンドーで、こゝにはガラスが嵌められてしまったが、左一間と奥へ二間、檜造りの大框が曲の手に廻って、客はその框に腰掛け、主人番頭が一つ一つ箱から取り出す上手の塗器、茶道具などの品定めをしゃうといふ極めて落ちついた店構へ、寺町三条南、西側漆器店「みのや」の店である。商売柄だが主人稲垣孫一郎氏が若いに似合はず好古趣味のある人なので、維新前からのこの店構へをなるべく保存したいといっているだけに、框はますく麗しく油雑巾で拭き込まれて行くのが嬉しい。」

『照宮内親王御婚儀和食器注文書』

「 御注文書

一、金六千弍百拾円也

但、漆器和食器大揃三十人前

内訳	品名	摘要	数量	単価	小計
一、本膳		溜塗銀縁	参拾枚	参〇、〇〇	九〇〇、〇〇
二、二の膳		全	参拾枚	弍五、〇〇	七五〇、〇〇
三、脇引		全	参拾枚	弍六、〇〇	七八〇、〇〇
四、吸物椀		黒見返朱松に桜蒔絵	参拾個	弍五、〇〇	七五〇、〇〇
五、二の吸物椀		黒見返銀	参拾個	弍八、〇〇	五四〇、〇〇
六、煮物椀		黒溜松に桜蒔絵	参拾個	弍参、〇〇	六九〇、〇〇
七、箸洗小吸物椀		朱松に桜蒔絵	参拾個	弍参、五〇	四〇五、〇〇
八、銚子		溜塗 全	参対	弍参〇、〇〇	参九〇、〇〇
九、通盆		溜塗	拾弍枚	弍〇、〇〇	弍弍〇、〇〇
十、飯器杓子台添		全	六組	六五、〇〇	参九〇、〇〇
十一、茶台		全	参拾個	弍弍、五〇	参七五、〇〇
十二、むし台		全	参拾個	四、〇〇	弍弍〇、〇〇
備考		合計			六弍弍〇、〇〇

(一)外箱添の事

(二)納期 昭和拾八年三月三十一日」

『ビルマ・バーモ長官御用食器計算書』

記

金九百円也

品名 員数 単価 小計

一、高足膳 拾客 五〇、^{正味} | 金五百円也

一、吸物椀 拾客 二〇、[〃] | 金貳百円也

黒真塗 古代模様付箱入

一、煮物椀 拾客 一五、[〃] | 金壹百五拾円也

朱塗 箱入

一、右荷造費 金五拾円也

以上

右ビルマ バーモ長官御用品として

御下命相成候事を御証明ニ下度此候

及御願ひ也

陸軍省 軍務局 軍務課 上

京都市寺町通三条南入

みのや漆器老舗

⊕ 稻垣孫一郎

電話本局②〇四一二番

振替東京五三四九番

昭和拾八年七月出

右申出ノ件実証也

昭和十八年七月七日 陸軍省軍務局

南方政務部長 白井中佐抜印

八代稻垣和三郎当時の美濃屋栞

美術漆器蒔繪品

並ニ金銀木杯調進

^{宮内省}御用品調度

京都市寺町三条南入

美濃屋 稻垣和三郎

電話長中(四一二番)

振替東京(五三四九番)

みの屋乃漆器

品質 精選

技工 堅実

意匠 洗練

京都寺町三条南

みの屋老舗

電本局四一二番

(灰野昭郎)